女鑑

明治廿七年十一月十四日發行

第七十四號

東京國光社

女鑑第七十四號目次

蝦夷の孝女



女鑑

人生終身の快樂

人生の最大快樂は、飲食衣服にあるか。聲音美色にあるか。あらず。飲食衣服も、聲音美色も、唯、口體と、耳目との快樂を感ずるのみ。亦、時ありて、飽厭の念を生ず。最大の快樂は、こゝにあらず。

人生は、苦痛の中に終はるべきにあらず。必、終身の快樂なかるべからず。終身の快樂は、則、最大の快樂なり。この快樂や、耳目口體にあらずして、精神にあり。精神の快樂は、唯、其の心に存するのみ。あゝ、この心の快樂こそ、實に、人生の最大快樂にして、即、終身の快樂なれ。故に、能く、この快樂を全うせん

には終生、苦痛の中にありても、其の心は、優然として樂しむ所あり。蔬食水飲、肱を枕にし、簞食瓢飲、陋巷に在りて、樂、其の中にあるもの、即、是なり。心の快樂は、善を爲すより大なるはなし。善を爲すは、人生の本分を盡くすものなれば、之を盡くして、其の道の至極に達するときは、身、卑賤なりとも、人、皆、其の德を慕ひ、家、富貴ならずとも、人、皆、其の風を崇ぶ。況、王公貴人の上に於いてや。其の德の及ぶ所、更に、大なるものあるは、言を待たざるべし。

善を爲す道は、心にあり。この心を用うること、愼重にして、萬般の善を取り、惡を捨て、其の一身一家をして、安寧ならしめ、外は、世上の公利を長じ、公益を開き、君國の恩に報ゆるは、善を爲すの大なるもの、古人の、所謂、父母、共

に存し、兄弟、事なきは、一の樂なり。仰いで、天に愧ぢず、俯して、人に、愧ぢざるは、二の樂なり。天下の英才を敎育するは、三の樂なり。などの如く、大なる快樂を得る道、此に存するなり。

かく、其の身をして、至善至美の身とならしめ、其の心の及ぶ所、仁慈の發するにあらざるなからしむれば、終生の間、爲す所として、善にあらざるなく、其の心の中、常に、洋々たる和氣の充滿するあり。窮苦も、之を奪ふことを得ず。威武も、之を掠むることを得ず。仁者は、敵なく、善者は、福を受くといへる言の、實にして、虛ならざるを知るべし。

あゝ、積善の餘慶あるは、固より、當然の理なれども、餘慶幸福を求めん爲に、善を爲すは、甚、誤れり。之を、名利を好むと謂ふ。人の、最恥づべき行のみ。

唯、善を爲す、最樂しといへる一念、乃、終身の快樂を淵源開導し來れるものなることを思はゞ、其の用心の存する所は、知るべきに庶幾きなり。

今の世の人、自愛、自利の途にのみ迷ひて、其の德行を大にして、風化を、世上に及ぼすの、即、自愛自利の大なるものなることを察せざるが多し。其の愚昧なる、笑ふべきのみ。あはれ、諸孃、能く、世俗に鑑みて、之を察し給へかし。

論說

國の内外

岩下方平

凡、國の内外あることは、國民の、皆、知る所なるべし。然れども、學問を爲すもの、多くは、西洋の學說をのみ信ずる餘、内外の別を忘るゝに至るものあり、

況、内外尊卑の分をや。

殊に、婦女子の性質は、新奇を喜ぶこと甚しきが故に、内を尊び、外を卑しめ、我が國を重んじ、外國を輕くする本義を了解するもの、最、鮮きものなれば、其の學問を爲し、人を教育するに當り、内外を混同し、大義を誤るもの、實に多し、是、頗、世に、大害あることなり。因りて、聊、之を論せんとす。

世界の中よ、我が帝國の如き美國なし、我が臣民は、斯かる美國に生れて、聖天皇の御仁澤に沐浴するを得ること、誠に、無上の幸福なり。此の幸福を受けて、此の帝國の臣民となりては、我が國の外に、尊ぶべき國あるなし。我が國を重んじ、我が國恩に報い奉らんこと、最、急務とすべき所なり。如何よ、學術技藝の精巧なるものありとも、國力の强盛なるものありとも、我が國ならぬ外國

は、分外に崇尊すべき理なきこと、萬々なりとす。
若、此の義を辨へずして、妄に、海外の文物に、目を奪はれ、魂を喪ふがごときは、誠に、臣民の、深く愧づべきことならずや。又、最、深く戒むべきことならずや。
然るを、此に、心を用ゐずして、偏に、彼の學術、技藝を尚び、彼の風俗を悦び、我が帝國の尊、宇内に、其の比なきことを遺忘するものは、全、我が國體を知らず、我が歴史を、能く、讀み究めざるより、此の大なる過を生ずるものなれば、苟、學問を爲し、子弟をも教育せんとするものは、必、第一に、我が國體を、歴史に求め、確に、萬邦無比なる善美の國體を有することを明にし、内を尊び、外を卑むるは、臣民の本分にして、即、此の國體を維持し、國光を揚ぐる道なること

とを思はざるべからず。斯く、國の內外尊卑の分を嚴にし、明にして、而して後、文學も、技藝も、取りて、害なき限は、之を取りて、應用を廣くするこそ、誠の取長補短といふべきなれ。世の婦女子、尤、深く、之を思ふべし。努な懈りそ。

徳川時代女子敎育史評論（九）

岡崎遠光

二、同時代女子敎育の要概（下の五）

『女訓孝經』に曰はく、『女子、七歳にして、四德を敎ふべし。一には、婦德。心に備ふる善なり。二には、婦言。口にいふ詞なり。三は、婦容。身に顯す形なり。四は、婦功。手にとる業なり』と。此の婦功とは、指先の業にて、意味、頗ひろ

く、美術品の製造、その外、手にて、女子が製する事のすべて、即、機織、蠶業等迄も指せるものなり。今日の工女が、朝夕、從事する業の大半も、所謂婦功にして、昔より、父母の教ふべきものは、女子の習ふべき事としたりしと雖、今にいたるも、尚、東洋の風習として、職人の妻女、若くは、品物を製造する工女といへば、士農などよりは、遙に、劣等の人間と思ふは、最、大なる誤想なり。殊に、古は、富貴の家に生れ、朝は、烏の聲を、夢の中にきゝながし、夕は、雀色を合圖に、床に就き、貪眠し、飽食し、氣樂に、世を送る女子を、高尚にして、且、幸福なる人と斷定しぬ。然れども、是、また、大なる臆斷なり。

固より、豪家に生れ、教育を受け、立派なる人間となりて、嘉言善行、世を導くは、高尚なるに相違なしと雖、手にとる業を以て、珍しき品を造り、巧なる物を

拵へ、人の需要に供給する、亦、實に、高尚なる事業にして、前なる者は、無形上、國徳を益し、後なる者は、有形上、國利を加ふるものと謂ふ可し。但、頭を勞すると、手を勞するとは、自然、差違ありて、頭を勞する者は、手を勞する者より、比較上、高尚たるべき筈なりと雖、其の世を裨補するや、決して、甲乙なし。

されば、前の貪眠飽食、此の大御代を、安閑、消光して、何の益にもならぬ輩に比べなば、其の高低、固より、霄壤なり。これによりて、予は、常におもふ、兩親の、己に與ふる學資を費して、半熟の學問をなし、或は、腰折を、三四作りて、其の日を消了し、或は、小説を、一二册讀みて、何の功もなからむよりは、寧、手にとる業を、專門に修めて、力を殖産、美術の事に熱注するに如かずと。

是、我が女鑑の愛讀者に向ひて勸むるにあらず。世の或者に、忠告する詞なり。さて、又、德川時代に於いては、工人社會の生活の度低く、他の社會に比較しては、其の資產上よりいふも、其の子をして、敎育ある女たらしむる能はざりしは勿論、其の生計の餘裕ある社會にても、女子敎育、そのものゝ大必要を曉りしもの、少かりければ、まして、貧窮、その日の賃金にて、其の日を、辛うして送れる工人社會に於いては、殆、全、女子の躾方如何を知らざりしなり。其の兩親が、嘗て、敎育年齡にあたりし時も、其の又兩親が、敎育の功益を解せざりしを以て、己も、亦、その故轍を蹈み、故轍は、風習となりて、敎育ある女子は、異數にして、敎育なき婦人が、常數と考へられたりき。明治の世となりて、世人、皆、殖產、興業の必要を感じ、農學士、工學士などいふ名目の貴き事を、人の知

りたるより、自、職工社會の位地を高め、隨ひて、工人そのものゝ品格も高まり、又、位地と、品格との高まりたるゆゑ、教育の必要なるをも曉り、今日にては、普通の資産ある職工は、其の女子に、「いろは」「アイウエオ」を習はしめざるは、少き有樣となれるは、實に、教育の普及したるものにして、國家の爲に、慶賀すべき事なり。

然れども、是、普通の資産ある人、俚言にていへば、『親方株』位の社會にして、普通以下の工人に至りては、未、女子教育の必要なるを知れる者、極めて少し。此の普通以下の職人共は、多くは、無教育にして、甚、道理に暗きを以て若、夫、無頼の友人、己を、酒店、青樓に誘ふや、之を諾せざれば、男の顔立たぬ事と定め、其の友人を制するは、卑怯未練の擧動と思ひ、却りて、之を勸めて、相共に、

邪道に入る。一旦、邪道に、足を入るれば、其の下等の快樂を、終に忘却する事能はず。一家の活計は、夕陽と共に、西山に傾き、燈すに、油なく、食ふに、米なく、妻は、竟に、路頭に迷ひ、女子は、憐にも、人の掌中に歸し、はては、西へ、東へ、處定めぬ身の上となりて、あすは、たがつまならむと喞つも、詮なきに至る。是、往々、予の聞く處にして、其の父兄の不德は、惡むべく、その妻、女の不幸は、憐む可し。

且、工人社會は、手と、足とを以て、其の資本となすを以て、一旦その資本人の、此の世を去る時は、遺族の零落は、實に悲しむべし。封建時代に於いては、士族には、家祿あり。農夫には、不動産あり。商賈には、貨物あり。故に、繼續者、之を以て、渡世する事、易々たりしと雖、獨、工人に於いては、然る事能はざり

きっ是、同時代に於いて、同社會が、殊に、無教育の人間多かりし源因なり。今日に於いても、亦、然りとして、可ならむ。

夫、吾人が、朝早う、學校の邊を過ぐるにあたりて、汚れたる敝衣を着け、破れたる傘を携へ、道すがら、人と、悪戯をなしつゝ行く女生徒に遇ふことあり。而して、此の女生は、大抵、職工社會に生れたる女子にして、此の女子の汚れ衣と、破れ傘とは、正に、其の母が、『無教育ゆゑ、不注意、此の如くに候』との證文。或は、父が、『意氣地なしにて、赤貧、此の通に御座候』との看板を、示すに異ならず。之を見、之を聞きたる教育家、慈善家は、宜しく、勞働社會教育の方便を一考すべき事なり。これ、卿等の義務にして、御國の爲の事業にあらずや。

女子處世論（十二）

三輪田眞佐子

第十　みづから身の需用に應ずること

あはれ、杜鵑、その子を育てんとて迷ふとぞ。そは、自、子を育てんと欲するも、巣を營み能はざればなりとかや。人も、亦、かくの如し。みづから、おのれの需用を充す能はざるものは、その不便少からざるべし。近來、これも分業かれも分業と、大に、分業の効を唱ふる風潮あるは、固より、好みすべしと雖、身の需用まで、他人の助力を待つは、決して、得策にあらざるべし。

女子の、一刻も、他人の力を待つべからざるものは、裁縫、料理等の家政は更なり。衣裳の着樣、帶の結方などにあり。世の女子、多くは、身の装をなすには、必、他人の助力なければ能はざるなり。文物頻繁の世の中にては、勢、事情の許

さゝる折もあらんかし。よし、侍女數人を從ふる貴婦女とて、自、身體を支配ゝる道を知らざれば、耻辱なるに、况して、通常の婦女子に於いてをや。日頃、束髮の行はるゝを以て、かゝる結髮の樣は、自調ふるもの多けれど、日本流の束髮は、自調ふるもの多からず。されど、少し熟練したらんには、それさへ、巧に整へ得らるべし。元來、女子は、身體を、淸潔に、高雅になすべきものなれば、他人の手を假りて、結髮するは、非難すべきことにはあらず、されど、多忙の世の中には、時間の許さゞることもあらん。唯、その時に、蓬髮の醜體なからしめんと思へばこそ。周禮にもあるごとく、婦人、飾らざれば、舅姑にまみえずと。散髮にして、人に對するは、不敬なり。愼まざるべけんや。總て、身の需用を、みづから充す女子は、恒に、生存上、綽々たる餘裕あるべし。

化粧も、他人の力を用ゐず、自なす習慣を作るべし。殊に、髪剃を砥ぐことなど、必要ならん。髪剃を用うることは、尙、必要なり。女子は、男子と異なれば、襟頸などに、柔毛ありて、垢ぢみて見ゆるは、他人に、失禮のみならず、自他人より蔑視を受くる基ならん。

女子の業作は、總て、雅致と、高尙との趣味を離るべからず。しかも、その上、快速にせんことを要す。凡、女子の任務は、人の知らざる所に、手數を要すること多し。故に、快速の習慣を作るにあらずは、終生、狼狽の苦勞を脱し、良人の譴責を免るゝこと能はじ。執務快速の習慣なき女子は、客人に、茶を呈せんも、客人歸りぬる後にあらずは、未、準備調はざるべし。而して、この習慣を、疾くに改めずば、第二の天性となり、急用の爲、外出せんも、物見のため、外行せん

も、到底、定めし時間に、衣帯を調ふる能はざるべし。されば、快速の習慣も、亦、身の需要に應ずる手段なり。能く、世に、身を處せんと思はんものは、心してよ。往時、薫子といふ女史ありけり。誠に、秀才にして、博學なれば、當時、彼の女丈夫と稱せらるゝものなりき。されど、世帯的の藝能は迂かりけん。彼は、終始、自分の帯をさへ結び得ざりきとか。されば、他は推しはかり得べし。葢、そがため、處世に甚しき艱難ありて、遂に、身を托せんに、よしなかりける故にや、東洲といふ書家の妾となりて、晩年を送りきとぞ。あはれ、屈指の女傑さへ、世務を知らざれば、なほ、その末路、かくの如し。平凡の女子、鑑みざるべけんや。

史談

蝦夷の孝女

大町芳衛

武藏野は草木ばかりと思ひしに、かゝる言葉の花も咲くらむとは、かけまくもあやに畏き、九重の雲の上より、太田道灌にたまはりし御製なりけり。げにや、萬里、草茫々として、兎、跳ね、狐、躍る武藏野の中に住ひて、戈を枕にして眠る武士の身にありながら、いみじき歌ども讀みいでけれど、かくは賞めたゝへ給へるなり。敷島の日本の國の北の端なる北海道、昔は蝦夷といひて、往來ふ人も稀に、風寒く、雪深く、山邊には熊吠え、海邊には臘虎すだきけるが、今に至ても、土地未だ開けず、文化未だ普からざる處なれど、日の本の一部分なれど、八隅しゝ我大君の御稜威は到らぬ隈もなく、土人早く皇化に霑ひて、八雲たつ奥山に薪こる杣人、荒波さわぐ大海にあさる漁人の子らまでも、さすがに日本魂はありけり。あはれ、武藏野にさきし言葉の花にもまさりてめでたきは、われにあれたる蝦夷の島根の雪に埋れぬ土人の心の誠なりけり。

舊幕の頃、運上屋とて、內地の商人の此地に渡りて、商を營む者共ありけるが、みな、利欲心のみ深くして、つゆ、廉耻心なきあふれものなりけれど、土人を使役すること牛馬にひとしく、見目、形よき女子は其夫あるをも顧ずして抑留するなど、言語に絶たる擧動ども多かりけり。あはれ、歲寒うして、松柏の操、はじめて顯はる。かく人非人なる運上屋の虐待に遇ひて、心のまこと、爲に大に顯はれたる一人の女子ありけり。ナユヒリカといふもの、やがて是れなり。

ナユヒリカ女の父母の名は傳はらず。兄はサカイと云ひ、其妻はセタトレンといひて、一家總て五人、雪深き荒山の小屋の中にも、一家團欒の春暖く、いと睦まじく暮らしけるは、一年、漁獵の爲めに、兄のサカイ夫婦は、運上屋に雇ひ出されて、遠く濱邊に下りぬ。父母の膝下を離れ、住みなれし山里を出でゝ、海人のおく藻鹽の、辛き目見るは、深く嫌ふわざなれども、運上屋の勢強ければ、こばむこと能はず、二月三月たちて、漁獵、閑にならば、直に送りかへさむといへる運上屋の言葉を賴みて、なく／＼、袂を分ちけるが、二月たちても、かへさず。三月たちても、かへさず。遂に春と過ぎ、秋と暮れて、あまたの年月を重ねけれども、運上屋は、猶かへ

さずして、朝夕、苦役にあてたり。かゝれば、父母の歎きは一方ならず、日夜心を痛めて、俯して地にかこてども、天鹽川空しく恨を流し、仰いで天に訴ふれども、尺素歸雁に寄せ難く、門に倚るの情、ます〳〵切にして、身体弱り、氣力衰へけるに、年いたう老いて、歩行だに意に任せざれど、貧しき一家三人の生命を支ふるものは、唯、チユヒリカの腕なり。年若き女子の身なれど、孝心深ければ、勞苦を物ともせず、已れは襤褸を纏ひて、寒氣骨に透れども、父母には暖く着せ、已れは饑を忍びて、五體肉落つれども、父母の好める食物は、何くれとなく、とゝのへて侑むるなど、兄に代りて様々に慰めこしらへ、朝夕、山にわけ入り、川にあさりて、いとかひ〴〵しく立はたらきて、孝養をつくしけるほどに、父母は生活に不自由を感ずることなく、老の心慰められて、いとやすく殘年を送りけり。

チユヒリカ女は、心あくまでも、おとやかなれど、力は又なく強かりけり。時には、深く山奥よかけ入りて、手づから熊をも捕へけるとぞ。げにや、誠心こめて放ちし矢は、堅き石をも貫けりといへり。親を思ふ一念凝りたる孝女の腕先には、あらびにあらぶる熊の鋭爪も、自から碎くるなるべし。

チユヒリカ女、年頃になりぬれど、花さく薔薇の趣、ねも言はず、月さす賤の伏屋の風情、いとらうたけて、一輪、白雪の中に香を放ちそめぬ。何時までも一人にては居られまじ。早く夫を迎へて、共に働き、共に親に事へなば、一身に取りても、一家に取りても、よろづに、都合よかるべしと、人々勧めけるに、チユヒリカ女、答へていひけるは、親を養ふことは、おのれ一人の力にて足りぬ。夫を迎ふることを嫌ひはべるにはあらねど、親の心に愜はぬものならば、迎ふる甲斐なく、又、一たび迎へて、夫婦とならば、如何なることありとも、はなるべきにあらず。されば、なまじひに、夫を迎へて後悔せむよりは、おのれ一人にて、親に事ふるこそ、中々に、心安けれとて従はざれば、人々も、其親、思ふ心の殊勝なるに感じて、また、婚姻を勧むるものはなかりけり。

親の爲とて、夫を迎へず、十年も唯一日の如く、誠心つくして事へけるに、定命のがれ難く、父母相ついで世を去り、兄夫婦は歸り來らざれば、天にも地にもたよる人なく、チユヒリカ唯一人、天鹽川筋なヌウツといふ處に、心細き烟を立てゝ、味氣なき月日を送りけり。さるに、憐は同じ山里に、エヘトシンといふ老婆あり。其

柱とも、杖とも頼みし一人の悴のトシユイシユッといふもの、チユヒリカの兄夫婦と同じく、運上屋に下げられて、年久しく歸り來らず、家には、この老婆一人ぞ殘されける、此老婆、年七十を越へて、腰は二重に曲り、手足は枯木の如く痩せ衰へたれど、さすがに、命はすてられず、日々、山に入りて、草の根を堀り、また、草の莖など取り來りて、食物となせり。家も修繕すること能はざれば、柱朽ち、壁落ち、枕に通ふ風、骨にしみて、夜な〳〵、結ぶ夢も冷やかに、屋根剝げ、軒傾き、月影席に入りて、袖の露てりまされり。わづかに、筵など折り來りて、屋根にさし、壁をつくろへど、雨、雪どもはげしくふる時は、ふせぐに由なく、肌凍ゑ、骨痛み、一夜眠らずして、泣き明すこともあり、今年の暮は濱邊の便やある、春にもならば、悴や歸るとて、日夜待ちこがるれど、一回の便だになく、十年にあまれども、其子は歸らざりけり。なつかしの我子、うたての運上屋や。此天鹽川の川末に、悴は如何にしてか月日を送れる。せめては、此流れに身を投げて、亡體なりとも、悴に逢ばやとて、幾度か水に入らんとしけるを、悴若し歸り來らば、如何に歎くらむと思ひ返して、鬱々としてありけるに、チユヒリカ女見るに堪へかねて、慰めて曰ひける

は、世にたよりなき御身のはかなさも、我身の上に比べて思ひ知りぬ。トシユイシユツどのも、歸りたるは山々なるべけれど、こちたき運上屋にとゞめ使はれ、歸るに由なくて、常に心をのみ焦してやをはすらむ。おのれの兄も、トシユイシユツどのと同じく、運上屋に下げられて、今に歸り來らず。日夜待ちわびて、心もとなく思ふにつけても、御身の心、さこそと思ひ侍るなり。我家もあれたれど、御身の家にはまされり。衣のつくろひ、朝夕の食物ども、トシユイシユツどのに代りて、心を盡しまゐらすべけれど、今より我家に來給ひねとて、つれ歸り、眞の親に事ふるが如く、いたはりければ、老婆もいたく喜びて、日夜感涙をとゞめあへざりけり。

ウツより上の方に、ユツコヒウカといふ處あり。玆に、アナウテシとて、四十路にあまれる一人の男住へり。其妻のルリカといふもの、運上屋に奪ひ去られて、これも唯一人暮なり。此男、數年前より足を病み、爛れ腐りて、今は腰のあたりも膿汁滴り、歩行することかなはねど、稼業はおろか、薪取り、水汲むことも、人手をからざれば出來ざるに、妻は奪ひ去られて、一人取りのこされたれば、その心細さは如何なりけむ。始のほどは、その近隣の人ども來りて、世話しけるを、滴り出づる

膿汁臭くして、息もとゞまるばかりなるにこうじて、遂には、近寄るものもなかりけり。チユヒリカ女、此由を聞きて、いたく憐み、これをも其家につれ來りて、膿汁のくさきをも厭はず、樣々に介抱して、情誼の厚きこと、血を分けし骨肉も啻ならざりきといふ。

あはれ、尊きチユヒリカ女の心かな。古人も孝は百行のもとゝ云へり。チユヒリカの親に孝なりし誠心は、かく博愛に、かく慈悲に、物のあわれを知りて、女子の本分を盡すに至れり。その手づから熊を捕へしを見れど、氣象極めて勇烈なりしならむ。されど、たよりなき老婆をいたはり、人の近付かざる病人を介抱せし心のほどに至りては、けだかく、うるはしく、至誠天地を動かし、義氣鬼神を泣かしむるに足れり。身は蝦夷のはて、おどろの奥に在りて、荒れたる小屋の中に襤褸を纏へど、其心、其行、一に女子道德の標本を示さむとて、天つをとめの天降りたるにやあらむと思はるゝばかりなり。

女德の最、尊ぶべきものは、憐憫の心にぞありける。唯、其憐憫の心、以て一家を和らぐべく、社會をとゝのふべく、以て陰陽を理むべく、以て化育に參はるべし。

げに、紅の頬にかゝる情の露ばかり、世に、清淨にして神聖なるものはあらじ。思ふに、獨逸の封建武士、荒びにあらびたる醜のますらをどもが、特に、婦人を尊敬して止まざりしは、婦人實に此心に富みしに依れり。なべて、人は理屈に服し難くして、感情に服し易きものなり。桃李言はずして、其下自から蹊をなすと云へり。婦人たるもの、社會に其位置を高めんとせば、唯、其自家の憐憫の心の度を高むべきなり。然るに、世には、家富み榮えて、衣裳、櫛、笄に至るまで、時の流行に後れず。芝居の替目と云へば、必、往て看るの暇あれども、病にかゝれる親戚への見舞は怠り勝にし、小説の新板といへば、必、買ひて讀むの錢あれども、門に物乞ふ乞食には、手ふたがれりとて、一文だに與へず、花前に歌を咏じ、月下に琴を彈じて、表に風流を粧へども、物のあはれはたえて知らず、貧しき親戚を遠けて、富める他人に親しみ、下女、下男を虐く使ひて、唯、一身の耳目、口腹の欲を逞うすることのみを知れるものなきにあらず。今、かゝる貴婦人を、チユヒリカ女に比ぶれば、彼は錦もて包める土塊にひとしく、此は襤褸もて包める金剛石にひとし。尊ぶべく、慕ふべく、愛すべきは、此に在て、彼にあらぬなり。

左衛門佐の局

朧月庵主人

後醍醐天皇の御代。元弘の初つ頃。中宮の御所に候ひし左衛門佐の局といふありけり。平宰相成輔の女にて、容姿世に勝れてあてに﨟たく、情深き女房なりけり。一歳主上中宮の北山殿に御幸ましく〵て御賀の舞ありし時、局は琵琶の役にて青海波を彈じけるに、妙なるしらべには、空ゆく雲もいゆきを憚り、梁の塵も動かん許りに覺えて、主上をはじめ並みゐる上達部殿上人、やゝと許りに感じける。此折しも、萬里小路中納言藤房の卿はのかに見そめて、切なる思ひの通りてや、その夜わりなき契を結びけり。さるに、その次夜、主上日頃計り給ひける關東征伐の御企露顯して、六波羅武士の御所さして押寄せ來れば、俄に都を御出ありて、南都をさして落させ給ふに、藤房卿も御供にぞ候らひける。唯一夜の本意なき契にて、今は憂き世の波風に隔てられ、亦何時逢はん限しらねば、名殘をしさに局の住みたる西の臺を訪ふに、今朝中宮よりの召にて北山殿へとなり。藤房卿はいながりて、鬢の毛少し切りて歌かき添へて置けり。

黑髮のみだれし世までながらへばこれを今はのかたみとも見よ

となん。局歸りて打見て、よゝと泣き伏し、絶えいらん許りなりしに、誰とは知らず、京に打入りたる東夷の流石に名ある者と覺しきが、御所に入り來りて、局の袖引き、しなだれかゝり、果はさうなくゐて行かんとするに、否ともいはゞ恥かしき目にも逢ひぬべく覺えければ、たゞ謀りて免れむに如じと思ひ定て、今宵忍びて參りなむ程に、必忘れで待ちねかしと透かせば、夷はむづかしき頬髯撫で、打ほゝゑみ、さらは歸りて待つなれど必約をな違へぞと、悦び勇みて歸りける。後に局は打歎きて、わが身いかなれば斯く宿世つたなきや。父母には幼くて別れ、果敢なき月日をおくる中、偶々優しき人に逢ひそめて嬉しと思ふは夢の間。うたてや、世は苅薦の亂れて畏き上さへ古衣き奈良の里にさすらへ給ひ、その人も共に從ひ參りつれば何時を逢ふ瀬と計りがたし。兎ても角ても、淺間しき世に長らへて、汚しき夷の辱目に遇はんより、如ず、淵河に身を投げて死なむにと、心定めて卿のかき置き給ひし歌のうへに、

かきおきし君が玉梓みにそへて後の世までのかたみとやせん

とかき添へおきて、かたみの髮を袂に入れ、大井川の流に長き恨を遺しけり。流石

に忠義の藤房卿が契りし女程ありて、一夜の情に操たてゝ、朝敵の夷に汚されじと、百年の命を捨てつる心情、あはれといふも愚なり。昔の女の心情は總てかくある物を、今の女はいかに、鑑みねかし。

漫録

天長節の日妹に敎へたる文

鹽井雨江

けふは、十一月の三日、やがて、たまちはふすめらみことの、あれましつる日なり。久方の天のやちまた、塵ばかりの雲も立ず。もゝづたふ八十島は、風はれ波靜かに、山河も照りわたり、草木もにはひこもりたる。おん行末も、自仰がれ奉るになむ。

此のごろ、ことさやぐ韓の夷は、遥におん惠のあつきに泣き、遠くおん光りのめでたきを拜ぎ、又、皇軍の旗風は、はや九連の山を震ひ、黄海の原を動かし、唐土の草木も、靡きはてむとするといふも、思へば、何時か、わが天皇の御威の、宇宙の中にひろがり、我天皇のみ德の、天地の間にあまねからむずるみしるしにやあらむなど、思ひ奉るにつけて、草の庵の露も、身にあまり、野末に

生れたる身も、世の有り難く、そゞろなる涙を掃ひて、遥に廣島の行宮の方を、ふしおがみ奉れば、又、御國のおん爲に、大御民の爲めに、寒暑をいとはせ給はず、玉なす御身をつとめ、錦なす御心をいためたまふ御姿の、よそながら忍ばるゝも、かしこしや。あはれ、石瓦のこの身、惜しむべきものならじをおぼえて、窓を淸め机を正して、終日、文かきくらせば、妹なる者二人、外ざまより歸り來りて、あなわがせのをかしや。天皇は、親しく大御旗を廣島に進めさせられ、皇軍は、いさましく唐やまの雲をわけ、もろこしの海原の波をしのぎて、戰ふといふ今日の日に、なほ文など書き興じ給ふかといひ、筆もて戰ひたまふべきにやなど、笑ふもにくし。あながま、汝等は、何にゝか、さは心なげにさまよひありき、事もなげに笑ひ興ずる事のみする。おこのものやと正せば、いづくへか徒に行き侍るべき。けふに千代用のおほ宮を、拜ぎにまゐり侍れるなりと、上なるがいへば、次なるも、わがせ子は忘れ給ひつるか。けふは天長節に侍るものをといひて、互にはゝゑみて、かゝる尊き天皇の御代に生れ出でゝ、かゝるうつくしき御國の民といはれ侍る身の、いかでうれしさの限に侍らずや。かゝるおん時に悦ばぬ者こそ、おこなれといひて、どよめきぬ。いみじくも申したり。汝らも、そを知りてか。おのれとてうれしさに、今朝かけて、涙にむせびて

ありき。そを知りたる汝らか、わが文かきつとむるを見て、時知らぬ人ぞと笑ふこそ、むら肝のわが心には、さとりかねたれ。さては、如何なる事してか、御代にむくひ、天皇に盡くし奉らむとか思ひたる。きかまほしといへば、二人は何思ふらむ、容姿を改めぬ。

そは、わがせよ。よしや數ならぬきはに侍るとも、男兒にし侍らば、よしや皇軍の馬かひ童とも成り、御船の炭はこぶ奴ともなりてだに、仕へまつらむとこそおもへ、さる數にも及ばぬ女子の身の、くちをしさをいかにせむ。せめては、傷める軍のため、藥をわたゝむる女とも、包帶とやらいふ布まく女ともなりて、御國に報ひ奉らまほしう侍るになむ。さは、何處に願ひ、誰に頼まば、そを許されㇾ侍らむか。わがせは、必や知ろしめさむ。敎へ給へと、上なるがいへど、次なるも、けふしも途すがら、姉のきみと談らひ侍りし事なりといふ。

あなをかし。さばかりの心なればこそ、わが文かく業を、をかしと思ひつるもことはりなりけれ。いでや御國に生れつるからには、天皇に盡くし奉らむま心は、誰も彼も、おなじ事にしあれど、人人おのが際により、そがむきによりて、自仕へまつらむ道に、けぢめあるものなり。まづ男女の間に、ちがひあり。遠つ御祖が、民の貢を定め給ふにも、男には弓はず、女子には手末と、仰せ給ひしふる事をも、思ひみよ。男には男たる務あり。女子には女子たる業ありと、敎へさせたまひたるおん詔を、思ひ見よ。汝らは、女子ぞ。女子と

いふ事な忘れぞといへば、さばかりの事えらでやと思ふらむ、次なるは姉の方、うち見てはゝえむ。さて、男は男の中、女子は女子の中にて、又さまざまの際によりて、いろ〳〵の務に、けぢめあり。大刀劍手に取りもちて、御國を守りわだを討つも、天皇に仕へまつる者の業なれば、文机にうちむかひて、天皇の御詔をうけ、下れる民を敎ふるも、又御國に仕へまつる者の務なり。言の葉の色に心を染め、人の心をやはらげむと思ふ人も、あきなひの業に身をやつし、黄金をあつめむとする人も、おなじく御國に天皇に仕へまつる民なり。唯、其きはにより、其の品異るのみ。汝らが、常に、いみじき大人とはやす眞淵宣長などいふ翁が、古の學を起して、世の人の心を正しつるも、

又は、維新の折の大丈夫が、錦旗をふりかざして、皇室の御稜威を、天が下に知らしつるも、諸共に赤心を盡しつる秋津島山のやまと男子なり。いづれが功勳あり、いづれが勤めざりける者といふべき。されどぞや。わぎもよ。平壤の彈雨を犯し、渤海の怒浪を凌ぎて、北京に皇國の錦旗を建て、御稜威を、四海にふるはむと、をたけぶ大丈夫も、又積年の螢雪に骨をいため、萬卷の書間に、思を焦して、人の心を言の葉の花に咲かせ、御德を、萬世に輝かさむと、つとむる文人も、彼方は大刀もて、此方は文筆もて、等しく天皇に報ひ奉らむとする者なり。わが筆をすてゝ大刀はかば、わが勤を忘れたる者。かれ大刀すてゝ筆取らば、彼が務を捨てたる者なり。さはいふも、それは

時にこそより、ものにこそあるなれ。われも馬前に參り仕へむ事あらで、いかで人に遅れむと思ふべき事かは。

汝らは女子あり。太刀とり弓づるはは、非常の事。常の業にはあらず。皇軍に隨ひゆきて、武士のいたつきを慰めむといふも、そがま心は、さすがに、敷島のやまと心のゆかりもこもれど、われ強に惡うはいはじ。さはいへ、汝らぞかりのかよわき者が、さる業願ひたりとて、いかで許さるべき。よしや、うけたまはるも、徒に皇軍の煩となる事や多からむ。あながちに、さる業せずとも、なか〳〵に、汝たちが品にかなひて、　天皇に報ひ奉る道の、無しといふ事なからむといへば、姉なるは唯々といらへ、次なるも聽かんと思ふらむ、身じろきて膝うちすゝむ。

かしこくも、天皇、親、錦の大旗を進め給ふとききて、都には送まつらざる人なく、鄙には迎へまつらざる者なく、　皇軍外國にむかへど、動かぬ山河も無く、靡かぬ草木もあらぬ、めでたくも有り難き御世のみ光、仰ぎ奉れど、　天皇の御稜威のたかく、御徳の廣くましますゆゑなりといへども、密に思ふに、又、國民の心の、やさしく美しければならむ。國民のやさしくうつくしきも、誠に　天皇の御稜威のたかく、御徳のひろくましますがゆゑとはいへど、又、父母なる人々の庭の敎の、やさしくうつくしき大和心の名殘もこもるになむ。上には御徳のめでたく、下には大和心のあかきがあるが故に、けふの御代の光も、かくはめで

たくしるくてこそあらめ。汝らは、女子なり。必、母となるべき者なり。やさしく美しき母となりて、やさしくうつくしき子を養ふべき者なり。わがいふ事は、此處にあり。汝らか　天皇の御恵に報ひ奉らむ道も、又此處にてこそあれ。女子は、女の道もて仕へたてまつるこそ、誠に國の女子といふものなれ。人は、其の品により務むるが、誠に國民といふべきものゝ常の業なり。しか思ひて、おのれは、天皇の御光のうつくしきを拜ぎ、皇軍のいさましきをきゝ、大和心のうつくしきを思ひて、いよいよかしこみて、斯くは文机にむかひたるも、なか〳〵に野末の身の、遥に御國に務めむと思ふ心の切なればなり。汝らもながせの心しらで、誠の女子となり。誠の母となりて、仕へ奉れといへば、ものもいはずかしこまりたるは、わが言の、心に入りたるならむ。さらば、諸共に君が代を祝ぎ奉らむといひて、千代に八千代にと歌ひ奉るも、げにおもしろき　天皇の御代なりけり。

根なし草

須賀の屋主人

上野

わがすむ家は湯島にしあなれば朝なに夕なに上野の岡不忍の池とはぬ日なし。とへば見るにつけ聞くにつけて心にうつるよしなし事のこゝちなればこゝに物するになむ。されば元より不忍の池の萍草の根あることにあらず。

むづかしきもの

秋風たつ頃より黃ばみてうら枯れゆく池の蓮葉。馬埒のふるびて所々くづれたる。精養軒の白堊塗。大佛の顏。摺鉢山。音樂學校の洋琴風琴の奏樂は亡國の音にひゞき、動物園の豚の鳴聲はとりこの支那人に似かよふ。されど其産の英吉利なるぞをかし。松源の風車。

ゆかしきもの

鶴の聲。鹿の鳴く音を深山ならずして聞くは動物園のたま物なり。兩大師の札の雪のなかに赤くたてる。彰義隊の奧槨に香げの煙たえぬ。櫻か岡、鶯溪、根岸の里は名のゆかしく。日暮の里、こツばりと呼ぶはわるし。清水堂の糸櫻。辨天のみ堂に若き女のねぎごとをするは何事にかあらん。入相の鐘、花の頃は更なり。

にくきもの

揚だしといふ家に朝客の多き。碧き眼したる人の馬車といふものに乘りてきたり顏に言さへぎゆく。放生會の魚とる童。

すさまじきもの

花見の人。茶店の床几。山下の馬車。廣小路のほこり。虎の吼ゆる聲。自動鐵道の響。馬に乘りそり身になりてゆく人。黑門の丸のあと。雪の夜の電氣燈。

なかしきもの

忍が岡に不忍の池。西洋のみとる音樂學校の西洋ませぬ美術學校と隣りて共に文部省の直轄なりしもをかし。春さきの赤毛布に美術學校の制服。

海水浴

ある年の夏大磯の濱をすぎしに、麥わら笠かぶり白き裝きたるをみなどもの渚のかたに群れゐるが、そのさまの水かづき鹽くみなどする蜑女にも似ぬものから、何する人ぞとかたへなる里人にとへバ、やごとなき姫君女房たちの都よりきたまひて海水浴といふことをせさせ給ふなりといふに、目とゞめて見れバ、いづれも氷肌玉骨のみ姿は、三保の松原に羽衣かけて潮あびしてふ天津乙女にもまして、久米のやま人花山の僧正などには見せまじくぞおぼえける。さるにても、いかに身のやしなひなれとて胸乳かきたれ肌もあらはなるさまは海女もすまじきことにて淺ましからずや。昔和泉式部は貴船のみ社に祈でひして、巫のあやしき振まひして見せつかくせさせ給へといひけるに面あかめしものをなど思ひいでつゝ、かくなむよみける。

水づたふ磯のみるめに心せよ
身をおもふとて身をやすつべき

まみのあと物語といふは、五老山人石川雅望が雨夜のすさびに物しける書なり。雅文もてされたる事どもたくみにうつしたれバ讀みて腹よるゝことなむいとおほき。今そのうちの女にかかれる一ふし二ふしを抜きてこにはかゝげぬ。元より根なきことのみならむも秋の夜ながの寢ざめまぎるゝれうにもとて。

伊勢大和物語のはなし

むかし菅原孝標といふ人の隣に下司男のありける

が娘一人もたり。この娘常に孝標が家に行きかよひて馴れえたしみけり。ある日母にいひけるは隣の御方こそ物がたりぶみ好ませ給ひて世にありとあるものおほ方持たせ給はぬはなし。さなかりならずともわれも一巻ふたまきは欲しく侍り。いかで伊勢物語大和物語この二まき求めいでゝ我にたびてむといへるを母ふびんなる事をもいふ哉。隣こそ前の常陸の助にておはせ。御むすめと聞ゆる人もさやう書などみ集め給ふこともあるべし。今日だに暮しわぶる下司の家にて書などとりあつかはんは似げなく人わらへなることぞ。さる閑あらぬ裁縫のかたに心いれてひねり習へかしといとすさましと思ひていひけれど父きゝて伊勢大和の物語をはしといふとか。そはいふまゝに求めてやり給ひね。かれ男にしもあらぬ今日このごろはさる國々行き巡りて寺社のかぎり順禮しありきてこゝらの錢をこそ遣はめといひけり。伊勢大和の名所をあげたる書とや思ひけむ。いとをかし。

み裳ぎのよろこび

むかしえれ〱しき姫君おはしけり。み裳着のよろこびの日とて女房達そゝきあへり。乳母なりける人姫君にむかひ參らせて御裳着そめさせ給ひては昨日までとは事かはりぬれど萬老いらかにまづまらせ給ひおほどかなる御もてなしこそあらまほしけれ。たとひ菓物など人々參らせ給ふともつやつやみいれ給はで欲しげなる御もてなしなし給ひぞ。菓物などそばれとり食ふ人はまだ袴などもきぬ人のうへにて候など諫め聞ゆればうなづかせ給

ふをいぶかひありと嬉しと見奉る。さて四五日を過して御母君の御おろしとて乳母ひと間なる所にて栗をむきてほろ〳〵と食ひゐけるを姫君見つけ給ひてまゝはいかで裳着のよろこびもまだせざりしかと立はしりおはしての給ひけり。女房達もおとがひを解きて皆笑ひけり。

茗荷のしるし

田舍わたらひして絹商なふ商人日くれぬれば或家の戸をたゝきて宿かりなんといへばうけひきて明けて入れにけり。あるじの妻は恐ろしき心もちたる者にてこの旅人の包の重りかなるを見ていかで此包忘れて行けかし我物にしてむと思ひて主にささやきいへば茗荷を食ひたる人は心ばけて物忘れするものなりといふを聞て菜のみの皆茗荷をいれて食はせつ。さて商人はあけくれの空に起出でゝ立ちて行きぬ。妻は旅人の忘れたるもの見むと寝たる所にいりて見れどつや〳〵物ひとつなし。くはせつる茗荷のしるしはなかりけりといへば主いな茗荷こそしるし有りけれ。いみじき物忘れて行きぬといふ。妻なにを忘れたると問へど我に與ふべき粮代の錢わすれていにけりといへど妻げにげにといひて愈よ腹たちけり。人を計りて物とらむとして却りておのれ損をえたりける。腹黒なる心はつかふまじき物にぞありける。

赤き絲つけたる燕　（今昔物語）

今は昔。なにがしの國なにがしの郡に住みける人、親ありて娘に男をあはせたりけるに、その夫うせ

にけれど親また外の夫をあはせむとするに、娘これを聞て母にいはく、われ男にぐしてあるべき宿世あらましかば前の男こそ死なずして、あひぐして有らましか。男にはすまじき報のあれどこそかれも死にたらめ。たとひ夫をまうけたりとも身の報ならば、また死なむ。されば此事とゞめらるべしと。母これを聞き大いにおどろきて父にこのよしを語りければ、父のいはく、われ年すでに老いたり。事ちかきにあり。汝その後はいかにしてか世にはあらむとするとて猶あはせむとするに、娘父母にいはく、さらばこの家に巣をつくりて子をうめる燕あり。雄鳥をあひぐせり。そのをとりをとり殺して牡鳥にしるしをつけて放ちたまへ。さて明む年そのめ鳥はかのを鳥をぐして來たらん時に、それを見てわれに男あはせ給へ。畜生すら夫をうしなひつれど外の夫をまうくる事なし。況や人は畜生よりも心あるべしと。父母げにさもあることゝて、その家に巣をくひて子をうみたる燕をとりて雄鳥をとり殺してめ鳥には赤き絲をつけて放ちつ。さて明る年の春つばめを待つに、そのめ鳥はかの鳥にぐせずして頸に糸つけながら來れり。巣をくひて子をうむことなくして飛びさりぬ。父母もこれを見て、誠にさることも有りけりといひて娘に男あはせむの心なくてやみてけり。さて娘かくなむいひける。

かぞいろは哀とも見よつばめすらふたりは人
に契らぬものを

とぞいひける。これを思ふに昔の女の心はかくな

むありける。近頃の女の心はあはざりけるにこそ。燕もまた雄鳥なければ子はうまねども家に來りけむころあはれなれ、となむ語り傳へたるとなり。

藤原氏の盛衰

師岡須賀子

我が國、歷史上の三大改新をいはゞ、先、第一に、大化の改新といふならん。大化の改新をいはゞ、まづ、第一に、中臣鎌足の功績をいふならん。その鎌足にて、藤原氏のはじめなりけれ。天皇、そが功をよみしたまひて、大織冠とし、內臣として、政事を司らしめ給ひしより、其の子、不比等に至りては、南、北、式、京、の四家に分れ、女を入內せしめたり。宮子夫人、光明皇后などいふ、これなり。南家は、惠美押勝、仲麿を生じ、式家とて百川、仲成、藥子出で、北家は、房前より、永手、內麿、冬嗣をへて、良房に至りては、いよ〳〵盛にして、初めて、大政大臣、攝政となり、准三后、兵杖を賜はりぬ。惟喬の親王の、小野に籠らせ給ひしにても、藤氏の勢のほどは知らるべし。そが子、基經はじめて、關白となり、陽成院をおろし奉り、時平は、菅原の右大臣を貶け、仲平、忠平より、實賴にいたりては、攝政、關白を兼ねたり。道兼は、花山院を欺きまつり、道長は、四女を、后妃となすなど、皆、藤原氏の心のまゝならぬはなし。鎌足より後、外戚として、大政大臣として、攝政として、關白として、皆、此の一族のゆかりならぬはあらざりけり。さてこそ、道長の「この世を

ば我世とぞ思ふ」とまで歌ひたるなれ。されど、盛衰の理は、さもかり、いみじき藤原氏の上にも、のがるべからざるにや、頼通、教通にいたりては、代々の藤氏の政治上不滿の諸國司、源平氏起りて、其が勢、日々に加はり、かつは、後三條天皇、叡明に在して、藤氏の權力を殺がせ給ひけれど、九重の御園に、幾ばくの年月、咲きみちたる藤なみの色香あせて、後には、立かへる春にも、昔のにはひには比ぶべくもなかりしを、この大御代とありて、そがゆかりにやあらん。いとながく、松にさへかゝりて咲くよなど、いふ人あれど、いかゞあらん。

さはれ、藤原氏は、鎌足よりはじめて、道長に盛りに、頼通より衰へそめしと、いはゞいはむか。

をんな仁義物語下（一）

著者未詳

としごろなる女たち申けるは、物がたり申事もしらず候、さりながら五りんのみちといふ事あり、そのかたはづれをきゝはつり、すこしおぼえ候ほどに、かたりてきかせ候はん、五りんといふは、くんしん（君臣）、ふし（父子）、ふうふ（夫婦）、けいてい（兄弟）、はうゆう（朋友）なり、くんしんとは、しうじう（主従）なり、ふしはおやと子、けいていはきやうだい、はうゆうはともだち也、まづくんしんのみちは、天子をはじめたてまつり、くげ（公卿）大みやう小みやう、たゞ一人めしつかふものも、此みちをわきまへ申事かんえう（肝要）なり、もつともをんなもおなじ心ねたるべし、天子は

ばんみんをあはれみまします御事なり、むかしに、うわうと申みかどましますが、あるときぎやうかうなさるゝみちにて、とがにんをとらへきたる、うわう御くるまよりおりさせ給ひて、なにものぞとおほせられ、御なみだくませたまへば、しんかたち申さるゝやうは、これはわれとどがをしたるもの也、なにの御いたみかあるべきと申さるゝとき、うわうの給ふやう、げうしゆんの御代には、ばんみんみなげうしゆんの心になりたり、いまわが代には、めん〳〵のこゝろになりたるよと、御かなしみ有しなり、げうしゆんのみよには、とがにんひとりもなかりしかば、かくのごとくうわうのおほせられしなり、又たうわうと申みかどのみよに、天が大日でりなりしかば、はかせに御うらなはせらるゝに、人をいけにえにそなへ、御いのりあるならば、あめふりなんと申上る、たうわうおほせらるゝは、いま天のとがめは、われ一人のとがなり、ばんみんなにのとがあらむやとの給ひ、すなはち、いけにえのすがたに御なりあつて、天にむかひ御きせい有しかば、にはかに、くろくもおほひかさなりて、おびたゞしくあめふるなり、かくのごとく天だうと人だうと、はやくめぐみある事、人だうの心、天につうずるゆへなり、一こく一けのぬしも心はおなじ事也、たとへば五人三人ひとりふたりめしつかふも、かみをまなびて、其さうおうにあはれむ事なるべし、又しんかはうこう人のさはふの事、それ〳〵にちぎやうふちを給り、我のみならず、さいしをやしなひ、一代に

かならず、しゝそん〲まで、ふかきおんをうけていさゝかふほうこうするならバ、天むついかでのがるべき、ほうこうをつとむる事、それ〲にわがぶんざいほどに身をもちなす事人のみちなり、ぶんにすぎたるときはかならず人のしやくもつする也、人の物をかりとりてほうこうをつとむる事、みちにあらず、したるものゝいきどほりわれた、ついには天のとがめあり、又ぶんよりうちむに身をかまへてほうこうをするもひがごと也、これはしうの物をぬすむににたり、これも天のめぐみにかなはず、たゞわがぶんざいにしたがひて、わがうけとりたるやくをよくつとめ、かげひなたなく、二心なくほうこうして、おんをほうずるみち也、しうしうのみちは、おやのおんよりもふか

し、ぎにいたつては、おやきやうだいにもかゆるみちなり、をとこもをんなもこれおなじ、こうしのおきてをそむかずバ、ごしやうぼだいもよろしかるべし、こうしはげんせのまへにおいて、ぜんあくのむちりしやうありとをしへ給へり、佛のをしへは、のちのよにちごくごくらく有と、とき給ふ、だうりはおなじ事也、むかしからくにに、ちはくといふ人あり、其しんかに、よじやうといふものありしなり、しうのちはくをてうしやうといふものがころして、しそんまでこと〲くころしたり、かのよしやう、しうのかたきをうたんとて、ふところにつるぎをさし、かべぬりになりて、てうしやうしが所へゆきてころさんとす、てうしやうがもの共これをみつけて、のがすまじとす、て

うしやうしいふやうは、さすがしうに心ざしある
をかんじて、これをゆるせり、そのゝちよしやう、
わが身にうるしをぬり、あらずみをのうてこゑを
からし、らいさうやみになりて、いちに出てこつ
じきをしてかたきをねらふ、よしやうがつまも見
しらざりしに、ともだちが見しりてなみだをなが
して申けるは、其はうはそのちえさいかくにて、
しうのかたきのところにゆきて、ほうこうをせバ、
こしもとちかくつかはれん程に、なんぞきころす
ともやすかるべきに、なにとてかやうに身をハく
るしむるぞといへば、よしやう申やう、しうのか
たきに、かりそめにもほうこうをせば二心也、こ
れ人のみちにあらず、わが此しかたは、まつだい
の、ひとのしんかたるものゝ、二心あるものをば、

はづかしめむためなりといふ、そのゝちはしのし
たにふしゐて、主のかたきをころさんとねらふ、
こゝにてかたきにころされたり、ろむでに、きみ
につかへてその身をいたすとあり、しうのために
いのちをすつる事、にほんにもあまたある事也、
又其しなによりていのちをたもつを、しうへのほ
うこうとするだうりもあり、にほんにもへいけの
さぶらひ、あく七びやうゑかげきよは、しうのか
たき、かまくらのひやうゑのすけよりともをころ
さんとねらふとき、かのよしやうがまなびして、
身にうるしをぬりて、らいさうやみににせて、か
たきうたんとたくみしと也、あさゆふしうのおん
をうけながら、すこしもぶほうこうすべきだうり
なし、たとへばいやしきものゝ、一日のいとなみ

を見て、しうのおんをいよ〳〵しるべし、たかきほうこうも、ひきゝも、をとこもをんなもみちにへだてなし、されバげうしゆんのみよに、せつと云しんかに、五りんのみちをじんみんにをしへよとおほせつけられたり、孔子の給ふは、ほうこうをよくつとめて、ほうろくに心をかくる事なかれとをしへ給ふ、ほうろくは、ちぎやうふちかたきうぶんの事也、そのきうぶんはしうの心にあり、下よりはからふべきにあらず、よくほうこうをつとむるときは、しうよりおのづからほうろくをもよくたまはる物也、かやうにこうしのをしへのでとく心をもつときは、天のめぐみにかなひ、ぶつしん三ぼうもあはれみ給ひて、しそんじつそんまでもさかへはんじやうし、あくじもきたらぬもの

なり、しかるにしうのふかきおんをえて、あけくれやしなはれながら、しうのまへにてはほうこうつとむるふりをして、かげにてはまづしうのためは何ともあらばあれとて、わが身のよきやうによろづとりおこなひ、あるひはしうの物をついやしてわが身のたしみとし、かやうにほうこうをしなすによつて、天だうまにくまれみやうりにつきはて、さま〳〵のあくじきたる事なり、しやかによらいのきやうせつにも、一さいしゆじやうことごとくおんをしるべしとき給へり、さて、ふしのみちあり、人のおやたるものは慈をつくすべしと也、慈とは子どもにげいのうをもさせ、よきみちをもならはせて、身をもつやうにそだつるをいふ也、子をかはゆくおもはゞはねをおらせよと、こう

しのをしへ給へり、これおやの忢ひ也、おやの子をあしかれとおもふはなきゆへ也、さて子たるものは、かう／＼をつくすべき事也、天地とはちゝはゝとおなじ事なれば、ふかうのつみは、天ちのあひだにのがるゝ所なし、身をたてみちをおこなひ、おやの名まであぐるをかう／＼のをはりとの給へり。

花ふゞき

塩井雨江

その四

浮雲流水の、はかなき天地の間は、三春の花に開落あり、九秋の月に虧盈あり。一枝の影の移り、一葉の色の變りゆく、榮枯盛衰は、定めなき世の常なりといへども、いたはしい哉、櫻姫。おん父は、天皇の股肱、右の大臣ときこえたる藤原の顯公。世によしあるやむごとなき方の姫君と生れさせられ、かしこくも、上なき日の御子の、御息所と仰がれ給ひ、翠帳の奥、紅閨の中、玉の御坐、錦の床を重ねられ、なほざりの立居にも、上臈中臈のおん侍女に助けられ、假染めのおんものまうでにも、

花を裝へる御車に逐られ、黄金ちりばめる御輿に迎へられたる御身なりけるを。いたはしい哉、着もなれず、取りもなれず、穿きもならはぬあやしきおん裝ひに窶れ給ひて、我も人も、思はざりける憂き世のはて、幾重の峯や越えん、幾しほの海や渡らむ、現には、まだ見もせず踏もせぬ山河の道、賤機父子の者を、唯、栞とも岸とも思ひ賴みて、たどりたまふ、おん身の上ぞあはれなる。おぼし定められしおん事ながら、馴れにし故郷の土地を離れ　かなしき父母の墳墓に遠かるとおぼせる、名殘はをしき都の境、風は、頻りにおん衣にふきまとひ、露は、いとゞ亂れて掃へども去らず。幾度かたゝずみて、かへり見たまへば、山河も心あるか、秋霧たちまよひて、遠くおん行方を逐るがごとく、かたへなる草木も、うら淋しげにしほれて、近くおん袖を、惜しむに似たり。

秘に、おぼし給ふ事のましませば、關の明神をたよりて、あかき御光を仰ぎ、東山西山にのぼりて、高き冥加を祈り、さては、東大寺に詣でゝ、深き御徳を賴みきこゆなどまし給ひて、黄昏ばかり、漸々に、山崎のわたりまで、たどり着きたまふ。秋風なほふきまたひてやまず、夕露ます〳〵おん衣をまとふもあはれなり。

草の屋のあやしきを尋ねて、一夜の宿りを求めたまへバ、何とかいふらむ、名も知らぬ虫の、かごとがましく鳴きわび、誰が爲めにうつらむ、擣衣の音、終霄、枕に響けバ、故園の色は、おん眼をさらず、遠人の影は、おん心情に離れねバ、一夜もなしく思ひ盡くして、まどろみもえせであかせられ、きゝなれぬ鷄のねを數へたまひて、起き出でむとせらるゝに、おん勞れの容易ならねバや、み手はふるへて力なく、み足は膨れあがりて、痛さへ頻なれバ、立ちもあへずに、わづらひ給ふ。賤機は、とりすがりて、いたはり奉る。悲しい哉、當年の事。千歲の後なる今日の日、なは、淚のつきざるをいかにせむ。

おんありさまの、いと心元なく見え奉れど、武文は、かしこまりて、日數かぎりあるみ旅にも候はねど、けふ一日は、かくてもと、すゝめまゐらすれど、櫻姬は、もと、み心ばかりは、いさぎよくましませど、さばかりの苦しさを、御氣色にも、つつみたまひて、いなとよ、とく〳〵うちたゝむ。佇れむまで步びて止まむ。えゆかすならむ野邊にこそ、露とも消なめ。骨をも露さめとのみ仰せ給ふ。み心のまくべきよしもあらず。さはとて、步行よりは叶ふべくもあらねど、武文と

賤機とに助けられ給ひて、漸々に河邊に出で、山崎の渡といふ所より、水夫をやとひて、舟より淀川を下り給ふ。

一葉の扁舟、岸を離るれバ、身も、又水泡の邊りなりと見るに、心細さは、消えゆく思ひせらるれバ、舟底にうつぶしたまひて、おん顔もあげたまはねど、武文は、御心をまぎらし奉らむと思ひて、賤機にうちむかひて、此方に近く霧の立てるは、邂逅の神嶺なり。彼方に遠く雲のかゝれるは、金剛の名山なりなど敎ふれど、賤機は、そなた此方、ふしおがみて、神嶺に姫のおん身を頼み、名山に宮の御行末を祈りなどする心の優柔しさは、なか〳〵に、神嶺よりも頼母しく、名山よりも高き心地こそすれ。

櫻姫も、金剛山の名をきゝ給うてより、つく〴〵と見わたし給ひて、武文を見かへられ、あれや、都にてきゝつる、正成とやらむが、勤王の軍するとかきゝつる所か。嬉しき山やと仰せて、おん目も放たずまもらせ給ふ。それより、うどのゝ嶋をうしろに見、磯島のわたりも何時か過ぎ、淀川遠く漕れゆき給ふ。七瀬の川も、浪靜かに、神崎川も、さはる風なくて、み舟は、日ならず、津の國尼が崎の港につきにけ





り。これより土佐へは、海路なり。折節、大船の頼むべき便船あらねど、長者の宿に、一日二日、心もとなく暮らし給ふ。

悲しい哉。世の中は、道癈れ徳破れはてゝ、輦轂の下の武士さへ、虎狼なり。神聖の玉體を犯し、國家の良民を屠りて、よろこぶといふ無慘の世なれば、况してや、都を、とよはた雲のよそにのみ見る、天さがる鄙の野人に、禽獸のあさましき心あらむは、怪しむべきにもあらねど、思へば、妬く、口惜しく、無念情なき醜の毛物なりける松浦五郎といふ者。さらぬひの筑紫の豪士なりけるが、たま／＼尼が崎にありて、ゆくりなくも、御息所のみかげを拜ぎ奉り、光るばかりなるめでたきおん姿は、げにや玉藻のすそ、つま木のはしに見るべうもあらず。いかなる雲井の御身ならむ。あはれ彥火々出見の尊が、龍宮にあひ給ひしといふ神代のたわやめも、あるは住吉の小松が蔭に下りしといふ上つ世の天つ少女も、かゝりけんとばかりおばゆるに。魂も空になり、心も殼となりて、あこがれゆきて、秘に長者が家のはした男に、黃金を取らせ、うま酒を振舞てきけば、こは一の宮の御息所にましますが、土佐へ忍びて下り給ふなり。明日は、つとめて御船に出で給ふならんなどきゝ知りた

れど、五郎は、悅ぶ事、大かたあらず。よしや、竹のみ園生のおん身なりとも、斯く世に、うつされ給ひたる方ざまの御身なれど、奪り奉るとも、强にゆるしがたき罪とは成るべうもあらずと、あさましく、きたなく、いやしく、嫉き心起して、引き伴れたる家の子どもを呼びつどへ、夜半ばかりより、俄に旅の調度など、殘りなく沖の船に送りはて、取り奉らば、直ちに船手すべき用意を構へて、不意に長者の屋敷を襲ひ、御息所の旅館にあてたまふ寢殿にちかき御格子をうちやぶりて、亂れ入りたり。

賤機父女は、都出でゝより、けふまで、一夜さも、いぬるといふ事せねど、姫のおんやつれの悲しさに、わが衣手を知らず、姫のとにかくにおん恙のまさぬうれしさに、わが辛勞もおぼえず。姫は、今宵も、夜半過ぐるまで、おん物語し給ひて、明日はつとめて舟手なり、賤機もとくいねよ、武文もやすめよと仰せて、御寢り給ひけるが、賤機も武文も、有り難く承りながらも、いねむといふ心なければ、父は襖の外に侍りて、外ざまを守り、女はおん枕なる几帳の側にかしこまりて、おんほとりを守りてありけるが、賤機は、何となう胸轟きのせらるゝに、父よと呼びて、外

ざまをきづかへば、武文も、賤機よ、ないねぞと心を添へ、太刀を、かたへに引き寄せんとしたる折りしも、唯ならぬ人音、寢殿ちかくきこゆれば、やよ賤機、大事ぞといひざま、踊り出づれば、はやみ格子は破られ、さつと吹き入る浦風、もの凄し。

あな、何奴なるぞ。人ある家に、奇怪の狼藉。猪獵らんずる男ならば、山にこそせめ。人に戯れむとする狐狸ならば、野邊にこそせめ。武士の守れる庭に入る事やある。とく去れ、去らずやとねめつくれば、五郎は、から〳〵とうち笑ひ、人ある家と知りたればこそ、奪り奉らむ爲に推參したれ。とく、上臈を出せよかし。辭む命は無からむず。とくせよかしと、無法の言葉。武文は、さらに驚くけしきもなく、あなをこや、山だちならば、木をこそ樵れ。野武士ならば、草をこそ刈れ、盜人づれの、汝如きが、八十太刀振るとも、忠義の一心、一條ばかりも、動くべき我ならじ。いかでか、七生の命の限、仕へ奉らむ主君の姫上を、盜人づれに渡さむといふ武文やあるべき。唐の市にあされよかしと、たしなむれば、はだしたりや、憎き老武者。彼が舌の根たち切りて、新婿入の引出にせむと、五郎は、自殿上へ躍り上りて、下

知すれど、おくれじ者と、競ひかゝる多勢の刄を、武文は、ものともせず。右に左にうちはらひ、四十五年の春秋、身をかためたる敷島の大和造の一太刀を、縱横無盡にうちふりて、稻妻の天をかすめ、疾風の雲を掃ふ如き勢もて、此方をうち、彼方をつけど、五郎の家の子ども、何かは叶ふべき。首をうたれ、面を破られ、手足を斷れて、四人まで、あへなく仆れたり。武文は、死體をふみこえ〳〵て、なほも猛り立ちて戰へど、多勢の賊も、殿上に支へ得ず、しどろになりて散るさまは、岩ほに碎くる波の花。

武文は、面白げに、莞爾と笑みて、なほも追ひ掃らはむと、中庭に躍り出づれど、五郎は頻りにいらだちて、鬼なればとて、敵は一人ぞ。取り圍みて、うち取らずや。逃る者は、一討ぞと、刄を振りてのゝしれば、又よせかへす賊のむれ。聲をあはせ、太刀を揃へ、四面より、みぢんになれとうちかゝれど、武文は、動かぬ心、巖のごとく、波よる白刄、雨ふる太刀をかひくゞり、おどりこゑ、奮鬪勇戰、刺せど斬れど、多勢の賊なれば、益々ひろがりて、盡くすべうもあらず。されど、露ばかり屈せず、ひるまず、こゝを先途と鬪ふこと二時ばかり。賊はあたりの家に火を懸けた

れた、折ふし、わけそめむとする浦風は、火焔を煽り、黒烟をまきて、面をむくべきやうもあらず。

流石豪氣の武文も、力盡きぬ。今は、はやこれまでなり。灰とならむとならむまでも、切死せんと思ひ定め、最期のおん暇たまはらむとや、御息所のおん側に、走りよりたり。

花菖蒲

千稲子

其の十四

繁り合ふ常盤木の森の中に、蝴蝶の紋を打つたる紅の旗は、長閑に春の風に飜り、彼方の波寄する磯の邊り、岩根凝々しき壑のはざまには、數十琉の白旗旭の光にはためけり。

春の帝の靜に御くるまをきしらせ給ひて、御聲朗らかに萬物を呼び起し給ふ二月の初、磯馴松の梢に薄くかゝりたる霞は、徐に文を織る漣を浸し、長く伸び〳〵て遙に山の

腰を繞り、其絶間々々に莞爾み出たる梅の花は、谷間の奥深く長夜の眠を覺さゝる鶯を誘へり。今や宇宙は活氣滿々として溢れんとし、生ある物の凡ては濃陽の氣を吸うて起つて舞はんとす。

かゝる折しも、一度刄の電の林間に閃きてより、殺氣空を突いて陰々叢り登る。都より寄せ來りたる源氏の兵は、平家の城塞をヒシ〳〵と圍みて諸門の守りを攻めに攻め、大地を蹈み鳴らす駒の蹄の音は恰も雷の怒りたるが如く、勇ましき矢叫鬨の聲は山を震はし潮を湧かしめ、彼方此方より射出す矢は、長閑なる春の空を掠めて恰も秋の雨の注ぐが如し。

生田の森を堅め給ふ總大將は新中納言知盛卿にして、御子武藏守知章も之に從ひ給へり。兵凡そ一千餘騎、倔强の荒武者共の兜の緒を聢爾と括り附けて、鎧を透間もなく着込み、源氏の輩と名のつくものは木の葉一枚たりとも舞込ませじと、熊髯撚ひ立てゝ守り居る。されど強きを棄てゝ弱き方へ赴くは人の常にて、吾妻夷と呼れし源氏の兵も、先眞先に弱き者を攻め破れど、西の方に當りては夜も晝も絶間なく叫び合ひ打ち合ふ音凄じく轟き來れど、東の門の此方には、陣のみは布き詰めしも

矢を一流射込まんとする者もなく、闃として眠りたるが如し。これにより、中には腕を鳴して叫びていふやう。ヤア卑怯なる奴共哉、よしさらば此方より逆寄せて蹈み破りてくれんものと、意氣まきて逸る者さへあり。然るに其明の日、團扇の旗印を打つたる旗を眞先に押立て、谷も搖ぐ計りの鬨の聲を上げて寄せ來りたるは、兼て猛虎の如くにして當る可らずと評せられたる兒玉黨の軍と知られたり。彼等は幾度か大刀を振ひて門を押破らんと競へど、此方は如何で油斷すべき、來れや來れやと呼はりて、弓を駢べて望月の如くに引絞り、撰打に射出せど、流石に辟易して門近く寄り來る者もなく、二日戰ひ三日戰ひ日數は重なりて五日となれど、門堅きこと巖の如く、何時の日に破るゝとも見えざりけり。

其六日の曉、夜は爽かに明け離れんとする折、俄に白雷の落ちて摧けて山に谷に木に草に響き渡るが如く、一齊に上げたる鯨波の聲に、山彦は驚き噪ぎ潮は湧きて舞ふ。さては味方の門の守破れて敵の軍の亂れ入りたるかと、躊きながら顧れど、煙は跳ね飛ぶが如き音を伴うて舞ひつ重なりつ空に逆卷上り、消えのこりたる星の光を摩して覆ひ包み、炎々たる焔の未だ薄黑き天を燒いて、亂れ落つる火の粉は落花

の紛々として風に舞ふが如し。これぞ密に鵯越の絶壁を逆落しに落したる義經が軍兵の荒れたるなりける。

思ひ掛けぬ事なれど、諸門を堅めたまひし方々も大に狼狽へ惑ひ給ひ、右へ逃げ左へ走り、數萬の兵卒は縱横に馳け廻りて、恰も木枯の風の長嶺を落ちて枯葉を吹き上げたるが如し。

生田の森の陣は如何に堅しと雖も、大廈の壞崩に一個の柱の如何で支ふ事の得らるべき、早くも鉾を背に負ひて足を浮しつゝ、將に崩れかゝらんとす。

知盛卿は駒をたてゝ暫く嗟嘆し給ひ、かくなりては如何ともすべきやうなし、いざや靜に引上ぐべしと、塗込めの柄の大薙刀を引提げて、井上黑と名けたる駒を濱邊の方へ馳せ給ふに、知章も仝じく駒を早めて其跡につゞけり。愈々盛に燒え上がる焔の爲に、櫓の落つる響柱の倒るゝ音悽じく聞えて、煙は古綿の舞ふが如くに覆ひ來りぬ。

兒玉黨の者共は、それ大將の落ち給ふぞ、生捕れや討取れやと、刄を騈べて隙間もなく行先を遮るに、附從ひし軍兵等は主を恙なく落しまつらんと、弓引き絞りて放

つもあり大刀を揮ひて戰ふもあり、行違ひ摩れ合ひ、こゝを先途と腕の限り刀の續く限り戰へど、互に雄たけび呼はる聲、鬣を振ひて嘶く駒の聲、大地をも動かすばかりに勇ましき響き、飛び散る血煙は颯として紅の雨の如く、朽木の倒るゝが如き屍は彼方此方に折重なりて山を造れり。

かく烈しく戰へども、如何にせん味方は人少くして、敵は勝に乘りて新手の輩は愈集り來り、屍を蹈み越えて一寸も動かさじと爭へど、荒れに荒れたる味方の武士も、遂に力竭き枕をならべて討死したり。

知盛卿も最早是迄と覺悟したまひけん、彼の大薙刀を取直して駒の頭を群る敵の方へ向はしめんとしたまふに、知章はアヽヤと御側近く駒を駈寄せ、御覺悟はさる事に候へども、輕々しく御手を下し給ふに及び候はず、暫く御心を鎭めさせ給ひて、兒が爲す儘に御任せ下さるべしと云ふや否や、長き大刀を一振ひ振ひて駒の首を向け直すよと見れば、御免候へと式代して、前面を圍みたる敵の中に躍り入り、見る間に敵の武士二三騎を斷つて落せり。只一人殘りし監物太郎頼賢も戰ひながら此有樣を見て、韋駄天の如く走り來り、續いて敵兵の中へ躍り込みたり。

かくて暫くの間、追ひつ追はれつ戰へども、流石目に餘るばかりの軍兵なれど、必死を極めたる知章主從の爲に縱横に薙ぎ返されて、思はず左右にサッと開けば、此時こそと主從三騎、大刀の脊に駒をはたと打てば、駒は一躍り躍りて驀地に走り出で、蹄を鳴らして汀の方へ恰も疾風の如くに。

やがて波打寄する際を傳ひて遙に落ちのび、最早追躡する敵もあらざるべしと、互に顔を見合せてほつと長大息をなし、手綱を緩めて四邊を見廻せば、空全く明け渡りて旭の光は長閑に波の文の上を彩どり、冷やかなる朝の風は血汐にぬれたる鎧の袂を寛やかに掠めて去れり。此光景を眺れど、修羅の巷を馳せたる身を忘るゝが如きも、一度眼を返して過ぎ來りたる方を顧れど、未だ消えざる煙は叢り登りて、山をも森をも覆ひ隱して遙に海の波を浸し、潮風に簸られて騰りつ飜りつ浮び行けり。其波の上を離れて十數反ばかりの沖に、數流の紅の旗を押立てゝ一ッの大船の、海を壓して浮ぶあり。其れの方へ漕ぎつけんものと十數の葦舟に、殆、沈まんばかりにひし〳〵と乘り詰めて、木の葉の如く立ち返る波に搖られて漂ふ者あり。又陸の方には煙に包まれて叫び呼はる聲は囂々として轟き來り、尚互に打合ふ劍の音は木魂に

響きて殷々たる聲の聞ゆる。
三人は再び顔を見合せて發すべき言葉もあらず、やがて泫然として迸り出るは、堪へ難き涙の雨なり。
かくては果じと漸くに其涙を拂ひ落し、敵に離れたる所よりして海へ駒を乘り入れ、彼方の舟際迄泳ぎ附かんものと、再び駒の足搔を運ばす時、此方へ向つて足早に驅け來る旅裝束の二人の婦女あり、憂に窶れたる面に亂れ落ちたる髮を風に梳らせ、杖にすがりて見るも痛はしき有樣なり。
主從三騎は思はず駒を留め、かゝる戰場に婦女の身として大膽なる事哉と望み見る折しも、横手の森の木陰より、翩々たる白旗の表はるゝよと見る内、敵の武士の數十騎轡を駢べて逃さじと寄せ來りぬ。
此度は逃れ給ふまじくぞ見えたりける。

文林

寒浦落月　近衛忠煕

よせかへる波まに月のかげ見えて
うら風さむきあけがたのそら

橋上霜　東久世通禧

てりわたる月かとたかりあまの河
しもこそさゆれかさゝぎの橋

杜冬月　黒田清綱

たきすてに庭火の上に更けにけり
よし田のもりの冬の夜のつき

夜時雨　水野忠敬

時雨ふるおとさへ寒くきこえけり
風も身にしむ夜はのまくらに

冬木　前田利昭

椎ひろふさとの子だにも冬がれて
霜にあとなきもりのしたみち

冬夕　長谷信成

風にちる木の葉の音はきこゆれど
行かた見えずくるゝそらかな

海邊紅葉　諏訪忠元

唐ごろもうち出の濱のもみぢ葉は
浪のいろをもそめてけるかな

冬鶴　宮地厳夫

冬がれし芦まにゐてもなにとなく
ゆたかに見ゆる鶴のひとむら

霜夜月　坂 正臣

月かげをさむしと見れど庭の面に
まことの霜もおく夜なりけり

冬野　小出 粲

さとの子が小鳥あみはる冬の野の
かれふにさわぐ木がらしの風

山寒松　植松 有經

木がらしに吹さらされてわか山の
松のすがたもやせにけるかな

冬川　谷 勤

草川のみづはこほりて見ねながら
いづくに殘るひゞきなるらむ

冬夜　內藤 存守

ふきつのる雪の夜あらし寒けれど
かどもるいぬも聲たてずなく

冬祝　北鄕 久政

みつぎ物たてまつらんと小山田の
しづもみやこにいそぐ冬かな

夕落葉　鎌田 正夫

ちりしける紅葉の色も見えぬまで
くれはてにけり山かげのには

冬神祇　岩崎 勝從

霜さむき日枝のかみ垣にきはふは
世のならはしの祝ひなるらむ

森初冬　松本 高朗

冬がれてあらはになりし森かげの
やしろのひはだ霜ふりにけり

道奧日記のうち　西川 須賀雄

みやこ出てこゝにきぬ川來つれ川
思ひわたるもはるけかりけり

冬風　糸山　貞幹

山かせも氷りやしけんさ夜ふけて
さわぐ音さへたえはてにけり

鶴聲遙　藤井　行麿

朝なぎや鶴もこゝろにかなふらむ
うなぞらとほく沖になくなり

旗　草野　隆道

もろこしの虎伏野べもしめはへて
日のおほ御旗いまやたつらん

乞兒　大町　芳衛

門にたちて物こふためとたま琴を
世のたらちねは數へざりけむ

祝捷軍　三輪　義方

うちつゞくかち野の原の玉あられ
はれしかやふに月ぞてりたる

中將姫　佐々　豊水

ひばり山雲井にたかくのこりけり
さくらの花のかぐはしき名は

暮秋　柴田　顯光

うらがれの草葉によわる虫の音の
こゝろぼそくも暮るゝ秋かな

折にふれて　松本　道別

今朝のあさけ秋風さむし門に出ゝ
雁ゆくかたにはゝをしおもふ

冬眺望　柳原　愛子

八千くさの花さく秋はかくぞかし

ひろき野べとも思はざりしを

冬人事　小池道子

さ夜ふかくうつ音すなり賤の女は
つみしこひ綿ほしあけぬらむ

古戰場　諏訪晴子

今もなほむかし忍べばはたすゝき
あらしにそよぐあは津野の原

名所千鳥　三輪田眞佐子

蘆やがた磯のとま屋のともし火の
ほのかなる音まなく千鳥かな

寄竹述懐　安東菊子

こゝろだにむなしかりせば呉竹の
よのうき節はさはらざらまし

秋鳥　師岡須賀子

尾花ちる眞間の入江のゆふ風に
聲もみだれてうづら鳴くなり

寒草　海上壽子

霜むすぶ手まくら小野の花すゝき
秋のさかりはいめのまにして

霧中時雨　尾崎すう子

つく杖の竹のよながく日をふれば
小笠もやれてむらしぐれふる

寒夜蟲　望月元子

頼みつる草のむしろもやれはてゝ
夜をさむしとや虫のなくらむ

寒芦妨舟　竹内淑子

なには江の霜がれ芦のおそのして
そるゝにまかせ舟ぞゆくなる

新嶋守

茲は何處ぞおきの嶋の
岩をたよりて柱たて
柱といふもくろ木なり
防ぐばかりの氣色のみ
柴のいほりの唯しばし
いつを限としらぬ日を
雲かけむりか八潮路の
いその苫屋に軒ならべ
おとづる物は浪の音の
塩焼くけむりなびく方
をりしもすさぶ塩風に
水無瀬の昔おもひでゝ

讀人しらず

浪うつ磯のやまかげに
葦をふきたる庵あり
屋根ぞといふも雨露を
洩る月影ぞあはれなる
かりの宿りも物うきに
すごすぞ心づくしなる
いく重の浪を隔てきて
雫にそでやぬらすらん
はま松かせかあま小舟
我がふる里と思ひやる
濤の音ませバ目を覺し
むかしが夢か今がゆめ

後鳥羽院御製

われこそは新嶋もりのおきの海の
あらき浪かぜこゝろして吹け

暮秋雨

横井知萬多

風の音、ものすざましくなりゆくは、秋も、早くれゆくなめり。旅にありては、さらでゝ、物さびしき　ならひなるを、錦しけらむ如くなりし八千草の色も、大方あせはてゝ、菊のみ、ひとり、さびしげに、さきのこれるに、ふりくる雨の、夕ぐれの淋しさは、たゞに、鳴たつ澤のみにはあらざりけり。あはれ、故郷なるはらからはいかに、父上はいかに、母上はなぜ、くさぐさ思ひいでられて、いで、かゝるをりは、文にて

もかゝましと、机にむかふ折しも、奴の、こをど、さし出だせるは、文なりけり。何處よりかど、とりて見れば、母上の御文にてそありけれ。うれしさに、とく、ひらき見れど、日比よりも、こまでまとかゝせたまひて、風は、漸、身にしみわたれば、かまへて、身をなそこなひそなどあるに、さでは、同じ思にましけりと、いくたび、幾そたび、くりかへしよめど、中々に、戀ひしさ、いやまさり、何とはなく、端近く立出でゝ、西の方を見れど、はや暮れはてゝ、物のあやめもわかぬに、ながむる袖の、いみじくそほちぬるは、たゞ、雨のためのみにはあらざるべし。あはれ、この夕まぐれ、ふる里にも、かく、雨のふらむには、いかに、母上等の、内にもえいりまさで、わが身を思ひておはすらむとかへりいりて、又、文とりあぐるに、この雨にたへずやあらむ。いと悲しげに鳴きわたる雁の音の、二聲三聲、いと、物あはれにきこゆ。

清少納言　　師岡須賀子

捲きあげたる御前の小簾には、唐のしらぬ山さへ、見る心地やせん。ゆるさじといひし逢坂の關には、鷄のそらねやはづかしかりけむ。年ごろ思ひ立ちにし初瀨詣、いかに、心ゆきけむ。元輔が、のちといはれぬみならばと、答へまつりし折、いかに、面正しかりけむ。郭公たづぬる路の卯花垣、いかにおもしろかりけん。花にまがひて散りかふ雪、いかに、春ある心地しけん。さるは、また、花や、蝶やと、急ぐ日もと頼ませ給ひ、入相の鐘の聲、ことにと慕

はせたまひし折、いかに忝なかりけむ。皆に、この皇后の御爲には、火にも、水にもと、思ひかしづきしならむ。さてこそ、皇后の宮の御おぼえも、めでたかりしなれ。さるを中關白殿うせ給ひ、后かくれさせたまひなど、世の中、あらぬさまにのみなりゆけど、他し君にも仕へずて、終始、其の操を正しくせし人を、誰とかいふ。こは、一條天皇の御代、定子皇后に仕奉りし女官に、清少納言といふが、それなりけり。

千歳の紀念　佐々有鄰子

父ぎみは、官報を日々よみたまふものから、九月八日の大本營を廣島にうつしたまふ　勅命を覧たまひ、文案うちならして、あはれ、祖先備前守ぬし

は、文祿、慶長の朝鮮國の役に、加藤清正朝臣の備にありて、所々の合戰に軍功多ければ、感狀を賜りつるものを、今度は其國をたすけたまひて淸國をうちをさめたまふ旨の　大勅なり。かく士族のはしにつらなるも、祖先の國につくしたまひし隱德ぞ、老ぬれど、御着輦を拜奉りて、外國の役には不仕とも、大御かげを仰ぎ奉らん。いざ、妻子ども來たれ。旅裝せよとのたまへば、一夜の中にあゆひをとゝのへて、母ぎみもろともに三人。十一日、雞がねにわが家をいづ。別格官幣社菊池神社の鳥居のもとにて、夜はほのぼのとあけはなれけり。當直の神職につきて、幣帛たてまつりぬ。そも〳〵、菊池武房朝臣の元寇のをりに大勳ありしことは、蒙古襲來繪卷物をはじめ、當時の歷史

にくはし。式終ぬれど立出で、九州鐵道の植木停車場より滊車にのる。久留米市にて車を下り、國幣社高良神社に詣づ。此大神は、神功皇后の三韓を討たまひし時に、力をあはせたまひし大神等となん。こゝにても幣帛を奉りぬ。滊車にて。二日市にいたり車を下り、官幣社太宰府神社に詣づ。此大神の在職の時に、遣唐使船の停止を上奏なしたまひし事ありとか。恐みて幣帛奉りぬれバ、男爵西高辻宮司のもとより献供の品をたまはりぬ。二日市に立かへりくれバ、滊車は着きぬ。直にのる。箱崎驛にて車を下り、官幣社箱崎宮に詣づ。神門には延喜の天皇の御宸筆、敵國降伏の神額かかりて、いとかうかうし。幣帛奉りをへて、福岡市の正七位君の家にやどる。姉ぎみの嫁て在すところなり。

十二日、博多より滊車にのり、香稚驛に車を下り、官幣社香椎宮に詣づ。社頭のあや杉は枝葉しげりて、いとうるはし。例の幣帛奉りをへて、再度滊車にのる。赤間驛にて車を下り。官幣社宗像神社に詣づ。幣帛奉りをへて社頭を見めぐりつれど、父ぎみの指さしたまひて、これなん、平重盛公の支那國にもとめたまひし石ぶみの、今に存てあるなりとのたまへど、外國ぶりのは見るもうるさけれど、そこ〳〵にして車にのり、滊車道をはしり、小倉町にいたる。此所は吾舊藩祖從三位細川忠興卿の築城なしたまひし古城趾にて歩兵第十四聯隊の營所なりと敎へたまふ。むかしをしのび今をおもひやりぬ。企救の濱をすぎ、門司港に

つきぬ。進軍の兵隊はさらなり。遠近の國々より來集ふる人は、かたをすりあひて、いとくるしきまでにぎはへり。宿をもとめつれど、繁昌の衢はおもひもよらず。いと田舍びたる家に夜をふかしぬ。

十三日、本港よりのり出べき汽船は、廣島へ往復すとなり。名にしおふ、門司の瀬戸も波しづかにて、夢のまに。安藝の海とはなりぬ。今日の船出の遲がりしゆゑか、夜ふけて港につきぬ。宇品なるべし。

十四日。廣島にいたる。道すがら車めせ、人力めせとさりあへぬまで呼びかはしても、父ぎみは、汽車にのりたまひしのみにて、遠征官軍の苦勞をおもひたまひてか、足ゆひかためて、人力車には家をいでたまひてより一度ものりたまはねば、母ぎみもろとも、おなじ足ゆひにて市にちかづくころ、わが家にひさしくもの學て在し、讃岐の人にあひぬ。此人は、地方有志の代理をつとめて、大元帥陛下の御着輦を拜み奉らんと、昨日此市につきて旅館にあり。いざ〳〵、わがやどりにと、ねもごろに白したまへば、その言にしたがひ、金龍亭とかいふが一間にいりぬ。心をいためずして枕をとることのうれしさよ。

十五日、御着輦を祝ひ奉らんと、上なかしもの人人ひしめく聲は耳つらぬきて、午後よりは一きはにぎはしかりし。夕つかた、大本營には御着輦なり。禿筆につくされねば、今日の新聞紙を、千歳の紀念に家づとにはなしぬ。

なみ人の心ひとつに打ならす
　ひらでの音もいさましき哉

十六日、やどりを立て、もとつきし港にいたれば、筑前へわたる滊船あり黒煙天をこがしてはせいでぬ。金瀾船をうかべ、銀波楫をあらひて海上ゆばびかなり。

十七日、旭の豊榮登頃博多港につきぬ。直に滊車にのりうつり、三十里餘の道を經て。五柱勁芳枝樓には夕日のくだちにかへりつきぬ。明治二十七年の九月十八日肥後國菊池郡にすめる佐々有鄰子しるす。

雜報

●天長節　何時はあれど、今年程、めでたき天長節はあらじ。我が軍の指す處、堅城鉄壁も破れざるなく、戰へば勝ち、攻むれば取る、今日の天長節祥、めでたき日はあらじ。朝來、天氣晴れ渡りて、麗しき空に、都も、鄙も、聖壽の萬歳を祝ひ奉れり、此の日、陛下には、廣島の行宮に御座まして、皇族、親任官、勅任官に、拜謁を賜ひ、御陪食を仰せられしとぞ。又、宮中にては、「鶴聲遙」てふ御題にて、詠歌を徴させれ、　皇后の宮に奉られたりとなり。同日、華族女學校の

生徒一同は、午前九時より、參校して、正堂に整列し、　天皇陛下、　皇后陛下の御眞影を拜し奉り、君が代の祝歌を唱へて、聖壽の千代萬代をことほぎまつれりとぞ。

●田中光顯子の母堂及夫子兵士を厚遇す　子爵田中光顯子の令息、遜氏の、麹町元園町の邸宅は、間廣なれども、先つ頃、近衛師團衛生隊豫備員の宿舍に宛てましと、某中隊長、同家に就いて、差閊なきかを照會しゝに、光顯子の母刀自出で、斯る陋隘しき宿も、お構なくば、我らは、臺所の隅にも住みなむ程に、疊のあらん限は、何十人にても、御越し候へ。亦、半年、一年、逗留し給ふとも、そは、御心の儘なりとて、少も否む樣の見えねば、中隊長も感じ入りて、早速、二十餘名の下士卒を、同家に宿らせしに、爾來、母刀自には、腰も二重に屈りたる七十餘の老の身を以て、甲斐〴〵しくも、兵共を待遇し、帽子、外套などの、脫ぎ捨てゝあれども、自、柱にかけ、疊みなどし、亦、日に、三度、四度も、茶をいれ、菓子を調へて、自持運び、一同を慰めらるゝ厚き情には、鬼をも挫ぐ兵士も、嬉涙に咽び居るとぞ。この姑にして、かゝる嫁あり。小石川關口臺の本宅にある子爵夫人には、輕き裝して、日毎に、兵士が、三食に饗する料理を、自調へて、元園町の邸に持運び、母刀自諸共に何呉と、兵士の世話せらるゝとぞ。殊に、最感ずべきは、家にあらゆる絹、布の夜の物は、悉、兵士に貸し與へて、家の者は、皆、拷衾被きて臥せらるゝとなり。流石

に、令名高き光顯子の母堂、又、夫人程ありて、有難き心かけにこそ。世の諸嬢、西戎のナイチンゲールとかいふ藪鶯のお轉婆を、ことくくしう云はやさずも、此の母堂、此の夫人に學びなば、いかにうるはしからんよ。

●婦人の美擧　大分縣大分町の三浦のぶ子、大塚たつ子達の發起にて、左の趣意書を、郡内に配布ち、東西に奔走り、有志者を語らひて、梅干を集めつるに、其の量二十石となり、亦、別に、義金五百餘圓を得て、併せて、之を、恤兵部に獻納したりといふ。かゝる愛たき行ありてこそ、敷島の大和の女たるに恥ぢずといふ可けれ。今、主意書を得たれば、つぎに掲げぬ。

恤兵部獻品募集旨趣書

こたびの御親征は帝國未曾有の一大變事にして國家の安危　皇威の消長もこの一戰によるとみみにせり苟も帝國の臣民にして祖先以來世々皇室の恩澤に浴せし吾人たれか報國の丹精を致さゞるものあらんや然に妾等身は羸劣にして從軍の役に堪へず體は三從にして金穀の蓄ひなし何を以て洪大の　皇恩を謝し奉らんやさりながら三從の妾等と雖ども茲に應分の義務をはたさずして可ならんや之に因て本月本日より衣食を節し家政を儉し積で軍資に獻せんと欲し第一着に梅干を博く郡内に募り以て我親愛なる砲煙彈雨の中に奔走せる海陸軍の兄弟に贈り國恩の萬分一を報せんとす希くは同志の姉妹喜でこの旨趣に應せられんことを乞ふものは

中尾ひさ　長野さち　渡邊ゑい
野内しつ　高木ちか　山蔭ひさ
田島やよ　日佐ゑみ　岩田なつ
佐藤かじ　大塚たつ　織部ゆか

濱本きみ　三浦のぶ　後藤しつ
山村ふる

●老母二人の子の從軍を勵ます　幾個ありても、飽かず嬉しきは、此の頃の敵愾の美談なりけり。長野縣伊那郡市田村吉田に、本島禹太郎といふがあり。弟某と、二人して、老母を養ひ、日々の勞働に、細き畑を立て來りつるが、今回の役にて、二人とも、召集に應じ、出軍することゝなりたれバ、二人は、面打見合はして、我等、今度の出軍は、日本男子の、増して、軍人たる者が、國に盡くすに、亦と得難き好機なれど、假令、屍は、虎伏す韓の野邊に曝すとも、骸は、風荒れ渡る渤海の底に沈むとも、そは、我が恨ならず。元より勇み進みて出づべきが、偖、後に殘らるゝ母上は、貧しき家の、蓄とても非ざれど、老の身の、如何して、其の日を送らるべき。情なき事よと、二人は、夫と言はねども、自、憂の色の顯るれバ、老母は、二人が躊躇ふ氣色見て取りて、什麽、兄弟、我が家、今こそ貧しけれ。昔は、由緒ある家柄にて、忠義を以て、家の掟とまつる物を。今や、日清、事ありて、畏くも、大君には、日夜、大御心を惱ませ給ふれど、苟日本男子たる者は、心身共に、大君に捧け奉りて、目指す敵を、鏖殺にし、御國の威を揚げ、大御心を安んじ奉るこそ務なれ。我が身老いぬれど、未、身体の自由を缺かねど、日々の活計には差閊へまじ。汝等、我が事に、心を殘さず、出軍して、勇しき働して、天晴、功名手柄せよ。是、君への忠義にして、亦、我への孝行な

るぞ。努めよやと勵されて、二人は、後に、心殘しつゝも、勇み進みて出行きぬ。其後、母は、獨働きて、衣食し、人の慰問する者あるも、決して、女々しき振舞なしとて、郷人、皆、歎賞しゐるとぞいふ、誠に、瓜生保、義鑑らの母にも劣らぬ烈女といひつべし。

●老母の献金　是も同じく、老母の美談なり。本所若宮町に住む大高孫七の老母きつといふは、本年、七十二の高齢なるか、今を去る三十七年前、夫を失ひて、後は、家事を、凡て、子息に任せ、已は、老後の用意にとて、苧を紡み、麻を績ぎて、日々得たる金を、一錢の消費するなくて貯畜したるが、今は、積みて、百餘圓となりければ、死後は、其の半を、葬儀金にして、後は、後生の爲、築地の門跡に納めよと、常々、孫七に聞かせ居たりしが、頃日の支那征伐の戰爭には、お上にも、經費澤山にて、遠征の方々も、不知寒地に、嘸かし、不自由し給ふらん。我等も、御國の片端なれば、斯る事を、他所に見て濟むべきか。御國の爲には、後生も物かはとて、五十圓宛、陸海兩軍へ献納したりといふ。一老婆だに、大和魂の敵愾心、かくのごとし。我が軍、向ふ處、戰へば勝ち、攻むれバ取る、連戰連勝、誠に、故なきに非ざるなり。

●奇なる探險　去る五日の、讀賣新聞は報じていはく、本所區厩橋近傍にて、近頃開業せし、一の居酒屋あり。主人は女にて、年の頃やうやう廿を三ッ四ッ過ぎて、花の顔、柳の腰、らうたけた

る容姿なり。されど、別に是れぞと云ふ主ある風情も見えず。僅に、一人二人の雇人を使ひて、自、煮炊の事より、帳場及び客應接迄、甲斐々々敷立働き、卑しき身裝に窶せども、何處となく風采高尚き所あり。且は、學問に富みて、讀書の業さへ拙なからぬは、孰れ、由緒ある人の果ならんと、近邊の人々、不審しみて、只管之に目を注ぎて、其素性を探れるに、此の女將は、京都府下の豪家の娘にて、昨年までは、東京近縣の高等女學校に、女教師をなしをりしが、何か思ふ筋ありて、普く貧天地の風俗内情を探らばやとて、斯くはしつゝある者なりといふ。女史、繊弱き身を以て、自、貧天地に投じ、下等社會と伍して其實情を審にし、之が救濟の道を講ぜんとする、其志や善し。されど、若し一歩を誤らば、恐ろしき奈落の底に沈みて、遂に亦浮ぶ瀬なきに至らん。女史、それ深く愼しむ所あれ。

●耶教の不振　征清の擧は、痛く國民の心を刺擊して、久しく太平に眠りたる、大和魂を振り起したる今日、士となく女となく、誰か亦、猶太人の一刑人か、餘粕を甞め、吐唾を吸ひ、彼が囈言に耳を傾け、教會に禮拜する者あらんや。近來、耶蘇教會に、新加入者のなきは勿論、舊信者さへ、續續脫會して、何れの會堂も門前雀羅を張る程なりといふ。其の影響か、あらぬか。頃日、茗溪の、東京府女學校に、入學者の多くて、明治、櫻井などの女學校に、退學者頻りなりとかや。亦、或耶蘇主義の女學雜誌は、週刊の制を改めて、月一回に

なせしよし。余輩は、同業者の情として、其衰退を弔ふと雖、國家の爲には、双手を擧げて祝せざるを得ざるなり。振へ、國民、士も女も、振ひて、科戸の風の、天の狹霧を吹き拂ふことの如く、沖の千船百船を吹き拂ふことの如く、狹蠅なす夷が穢を吹き拂へ。燒鎌の敏鎌となりて、醜のしみ草を、切り拂へや。

●此頃までに賞與を受けたる婦人左の如し。

岐阜縣美濃國武儀郡大矢田村
井上吉太郎長女　きく

資性温順父母に事へて至孝父吉太郎は二十餘年前兩眼明を失し業務を執る能はず家素より貧困なるを以て平常母を扶けて農業に從事し傍ら紙漉を爲し僅に賃金を得て父の嗜好は必ず之を薦め扶侍奉養至らざるなく其志行の變らざること玆に二十餘年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金三圓下賜す

島根縣出雲國神門郡上津村
宮本熊五郎二女　宮本なか

平素父母に事へて孝養を竭し母病に罹るや夏凊冬温看護到らざる所なく且つ貧困の間に處して能く家計を扶持し十有餘年志操一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金三圓五十錢下賜す

岐阜縣各務郡須衛村
宇野傾右衛門妻　小野木りよう

資性從順平素夫に事へ貞實殊に明治十六年夫傾右衛門脊髓病に罹り身體自由を失ふや晝夜介抱怠らず家計貧困なるにも拘らず其嗜好は必ず之を薦め藥餌療養到らさるなし其志操の變らざる玆に十有餘年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

●年廼舍例會　十月兼題　里擣衣

遠近のさとにきぬたをうつならん　井上　正直
たゆみたゆまぬ音のきこゆる

秋風のふくおとそひてきこゆなり　前田　利聲
よさむのころも今やうつらん

唐ころもうつやきぬたの音さえて　水野　忠敬
わきもふけゆくさらしなの里

みとり子に今やろへちをなすならん　増山　正治
うちたえにけり里のきぬたは

夜をさむみふくるもしらで里人は　南部　利恭
月をみつゝやころもうつらん

松かせのこゑにあはせて賤がうつ　増山三雪子
里のきぬたのおとぞすみゆく

里の名の夜寒もいとゞ身にぞしむ　大岡　操子
ひゞくきぬたの音ぞひまなき

てる月のかつらの里のさよきぬた　溝口久爾子
うつ音さへにさえわたるかな

音なしの里とは名のみよもすがら　増山喜三子
うちすさぶなり賤がさごろも

玉川にさらせるつきのかげふけて　水野　鈔子
里のきぬたのおともすみゆく

秋もやゝさむきねざめの里びとは　南部　麻子
ときあらひ衣うちいそぐらむ

秋のよのねざめの里にきこゆなり　南部　鋥子
うつおとさむき賤がさごろも

松の風なみのひゞきにこゑそへて　土屋　峰子
ころもうつなりすみよしの里

さよふけてふく秋風にさとびとの　酒井　鍈子
きぬたの槌のおとぞみにしむ

小夜ふけてたゆみにけりな月清き　大河内一子
かつらの里にころもうつこゑ

うち日さすみやこはとほき里人は
秋きりころもうちきそふなり　鈴木重嶺

秋の夜のながたの里にからごろも
わかつきかけて打つはたが妻　江刺恒久

きくまゝに里のきぬたの音ふけて
うちそふものは夜寒なりけり　加藤安彦

皇軍におくらむためとさとごとに
ちからの限りうつころもかな　佐々木古信

おく山もひらけて里となりぬらん
ことしきぬたの音のきこゆる　梅村宣雄

旅にあるつまのよさむを夢にみて
ねざめの里にころもうつなり　三浦千春

鴫のなく里のたかむら日はおちて
きぬたの音ぞきこえそめぬる　佐々木信綱

とほ里のきぬたの聲はきよふけて
老がねざめをなぐさめにけり　和田耘甫

遠くまた近くきぬたのおとすなり
里なれてこそねよげにはきけ　青木修

ふきおろす山風とほくはこぶなり
里わのしづがころもうつこゑ　櫻井侚保

山里のさむさはおとにしられけり
あかつきかけてころもうつ聲　渡邊信古

秋かぜの夜さむの里にしづの女が
うつやきぬたの音ぞ身にしむ　豊田三叔

いめ人のふしみの里のさよぎぬた
寢ざめて誰かうちすさぶらむ　川島宗端

秋風のふきくるごとにころもうつ
おとはの里のおとぞきこゆる　中橋隆美

さなきだに寢覺がちなる老が身に　門井　孝德
ゐねなとうつか里のさごろも

御軍のつまをしのぶるからごろも　鈴木　重信
うちしきるなり遠かたのさと

紅葉せぬときはの里はしづかうつ　千野　千種
きぬたのおとに秋をこそしれ

こぞよりもはやき夜寒をさと人が　鶴　久子
語り更かしてころもうつなり

遠つひと夜寒いかにとおもひやる　日尾　直子
ときはの里にころもうつらし

山ざとはまだきに秋やふけぬらん　渡邊須磨子
うちもたゆまぬ賤がさごろも

からごろもうつ音すなり霧はれて　荻野美左子
月かげたかきやまもとのさと

里の子はねよとの鐘もきかずして　河合　象子
いそぐきぬたやうち明すらむ

松風のふくがまに〳〵さとびとの　尾臺　靜子
うつやきぬたの音のさやけさ

誰か里もおなじ夜寒になりぬれど　勝田　肇子
聲かはしてもうつきぬたかな

秋ちかみ月のかつらのさととはく　小坂多餘子
うつやきぬたの聲のすみゆく

唐ころも月にうらみていねがての　後藤　兼子
里のきぬたもうちしきるかな

つきさえて秋風さむくふくる夜に　飯田　稻子
ころもうつなりたま川のさと

ちる萩のつゆをしむまに秋ふけて　南摩　牧子
ころもうつなりたまがはの里

夜もすがら衣うちはのさとびとは　宮田　道子
月をともにやあかすなるらむ

下たびうつきぬたの音に里の名の　宮木眞世子
ねざめさびしき秋のよはかな

秋ふけてさびしさそふる長き夜の　長瀬曾餘子
ねざめの里にころもうつなり

秋もやゝふけゆく空にきこゆなり　益子　逸子
よさむの里にころもうつこゑ

秋さむみねぬ夜かさねて賤の女が　諏訪　晴子
こはたの里にころもうつなり

遠近のきぬたのおともひとすぢの　諏訪　忠誠
ながれをつたふたま川のさと

秋もはやさむく嶋尾のさとびとは　諏訪　忠元
長きよすからころもうつなり

兼題

十一月廿日
- 歌　朝時雨
- 文　文會に友を招く文

十二月五日
- 歌　雪中松
- 文　寒夜讀書

敎の庭

十一月五日兼題　天長節

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

天たらし國たらしつゝましませと
きみがみあれを祝ふけふかな

地　岩手縣氣仙郡盛町　高橋政子

日のみ旗高くかゝげて日のみこの
みかげをあふく今日の樂しさ

人　愛媛縣新居郡大町村　藥師寺芳子

天地とともにさかえんおほきみの
あれましゝ日を祝ふけふかな

大君の御かげかゝげて千代八千代　青木春子
いやながかれと祝ふけふかな

（天地人のほかは原稿到着順なり）

大君の天降りましつるけふの日を　石井徳子
いくよろづ代と祝ふくにたみ

大君のあれましゝ日とやどごとに　永井さい子
さかみつきして祝はぬはなし

秋津島あさ日かゝやくみはたには　溝口直子
とつ國びともなびかざらめや

萬代ときみがみかげをかしこくも　諏訪晴子
祝ふ今日こそのどけかりけれ

日のみはた軒にかゝげてもろ人の　羽田三緒子
きみよろづ代と祝ふけふかな

天皇のおほみあれ日のもゝかへり　柳滋子
千かへりませと祈るげふかな

我が君のあれましゝ日を祝ふかな　竹内淑子
おのがこゝろのまことを盡して

幾千代とかはらぬけふの景色かな　安田つぎ子
わがおほきみの恵みゆたけき

天ながく地ひさしくとかむながら　佐々有隣子
たゞねて祝ふけふののどけさ

隈もなく大和をてらす日の御子の　澤田　春子
君が御代こそときはなるらめ

大君の御代ながあきといはふかな　徳永萬壽子
めぐみにしげる四方のたみ草

さしのぼる天つ日影によそへども　國武すま子
限りしられぬきみがみ世かな

萬代のはじめときみがおほ御代を　土屋てい子
いはふけふこそ喜しかりけれ

玉まきのみやこもひなも分ちなく　吉田　芳子
きみよろづ代と祝ふけふかな

大君は千代に八千代にましませど　吉田たけ子
しづの子らまで祝ふげふかな

唐山にあまつみはたをなびかせて　坂口しん子
きみの御あれを祝ふけふかな

つゝ昔もたかくひゞきておほ君の　坂口たみ子

あれましゝ日を祝ひこそすれ

君が代を祝ふこゝろはおしなべて　堀江　鈴子
みやこも鄙もかはらざるらむ

いわけなき初結子らさへ君が代を　芝山　豊子
千代に八千代と謳ふけふかな

天つ日の御かげあつさにとつ國の　松岡　琴子
人さへあふぐ今日にもある哉

日の御旗軒に立ちつゝかしこくも　江馬　信子
やごとに祝ふけふのめでたさ

朝日かげのぼるはまれどもろ共に　長山てい子
けふのまつりをいはふ嬉しさ

白菊のはなをかざしてみやびとも　太田　貞子
きみが千歳をけふやいはゝん

九重のきくをかざしてみやびとも　太田　幸子
きみが千歳をうたふけふかな

君が代は千代よろづ代にあめ地と　高作　貞子
ともにいませとけふぞ祝はん

今日といへも御旗かゝげて天皇の　植木　綱子
御代祝ふなりひなもみやこも

天皇のみかげかゝげてあまがした　河野　文子
たかきいやしきあふぐけふ哉

大君の御あれの今日を祝ぎかほに　藤澤　元子
そらまふたつもよろづ代の聲

萬代といはふもかしことしごとに　山田　先子
わがおほ君のあれましゝ日を

誰人もかはらざるらんとしごとに　高橋千代子
君をことほぐけふのこゝろは

賤くも戸ごとにいはふけふの日に　磯野　玉子
やすけき君が御代ぞしらるゝ

天地にみちてそたらへおほきみの　大橋てい子
みあれをいはふ民のこゝろは

日の御旗高くかゝげて天とともに　鳥山　龜子
ながくいませと祝ふけふかな

今日の日の光りあふぎて天がした　高井　米子
はたてなびかし祝ふもろびと

世の中に匂ひあまれるおほきみの　上野　兼子
めぐみを千代とあふぐけふ哉

世のひかり輝きそめしけふの日の　土生　清子
めぐみをうくる我身うれしも

いざ今日は菊のさかづき取かはし　降田　槇子
我がきみ千代と祝ひうたはん

四方の海なみもしづかに君が世の　溝口恵喜子
ちよよろづ代をいはふけふ哉

長閑さは春かとぞおもふ冬ながら　鈴木　秋子
わがおほ君のあれましゝ日は

日の本のひかりもきよくおほ君の　久保田律子
あれましゝ日と祝はぬはなし

やすみしゝわが大君を千代にまた　門田八重子
八千代へませと祝ふけふかな

明らけくをさめ給へるおほきみの　三原　豊子
あれましゝ日をいはふ民ぐさ

誰もみなことほぎまつれおほ君の　宇多田揚子
あれましゝ日は御影あふぎて

十一月五日兼題　立冬

天

松山市 鐵灼町　鳥山 鮨子

風の音にそおどろかれぬると秋ならば耳にも聞つべし桐のはの落るにも共けしきは見えぬべしされどまがきの菊は秋のにほひを殘し庭のもみぢは紅の色をそへ窓にさす日かげもいまだ寒からねばけふより冬と取出ん物だにもなしさはいへど晴たる空の俄にかきくもりて降るかと思へばまた晴わたれる時雨ばかりさだめなきものはあらねども是ぞ冬になりぬるしるしなりけるあはれ埋火の灰かきおこして積れる雪になりし世こゑのぞんも遠からじとおもへば今より身もわなゝくこゝちせられてならん

地

大坂府西成郡 今宮村　松田 靜枝

露にすだく虫の音も絶えぬ尾の上に啼く鹿の聲も枯れぬいつしか野邊も淺ましう變りはてゝ殘菊の一本あるも哀れ玉篠にはおく霜白くして照る月きら〳〵と凄じく夕嵐さとおろし來てはら〳〵と散る木の葉うづだかく時雨のあめに暫しの笠やどりと賴む蔭さへなしあはれ出雲の國のみは神有月どいふらん神無月は來れりうしとのみ思ひ過しつる秋は暮れて雪ふる冬は今ぞ立ちぬさても今更に過ぐる月日の早きことよ

人

長野縣 長野町　吉田 芳子

折々の遷り變りゆくさま何れもをかしからぬにはあらねど冬立つ晨こそすぐれてこよなけれひまもる風の冷かなるにまどろみかねてあけ行く空をまちわびつゝ板戸おし明けて見出せぞ昨日まで露を宿しゝ千草は枯れはてゝ霜をむすび暮れ行く秋をかこちたる虫の音もたえはてぬまがきの菊はさま變りてさきにほひ前栽の木ともは半梢をあらはせり朝日の山陰やう〳〵に白み行けども時雨るゝ空のけはひ何となく物あやしあはれ定めなき浮世の變る習ひもかくあらむなど打ちなげかるゝ折しも山寺の鐘のこゑのゝめ告ぐる響につれて高ねおろしの肌さむくふきすさび梢にのこれる紅葉をさそひちらすさまなど哀の限りに覺ねてなむ

羽田たか子

萩の上風おとつれしよりなく虫の聲とともに千草の花も咲いて置わたす野べのしら露にくまなき月のやどれるはたまともみゆ鹿のなく音鴈の聲秋のあはれのかず／＼もいつしかにすぐゆき盛り久しき菊の花のうるはしきもうつろひゆき錦と見てしもみぢ葉もきのふけふはこがらしにしくれとゝもにふりしきり擣衣の音もたえ／＼になりつるはいつこの里の人／＼も心なき草も木も冬の來りしに其さまおのづからかはりゆくになん

羽田千世子

きのふまで錦とみてしよものもみぢ葉もちりそめて染ししぐれも音たかきあられとふりかはりて時時のうつりゆくほどはやきものはあらずかしきのふのあきはけふの冬とかはりきしにすぎゆく月日のをしまれてひと日もあだにくらすまじとこゝろにとめてなん

竹内淑子

もみぢせし木の葉はなごりとしげもなくそよふく風にもおちちりてなく虫のこゑもたえわしたの水にけふりたちてよるのうづみひ猶たえやらぬころとはなりぬにはは野とあれてしもの花のみさゆ池のおもにたつなみも冬めきて夜半にむら立つとりのおとさぶく羽風に水も氷らんとぞおもはゆるよく風にちりかふ木の葉をかきわけて色もなつかしき菊の一本さすがに秋の名こりなるべしおもひめぐらせば春の花夏の月秋の千くささへかれはてゝけふの日とはなりぬとし月のひまゆくこまのあしは實にはやきものにぞあるをりしもくつわむしこゑもかれ／＼にきくのかげになきいでぬ

安田つぎ子

花に戯むるゝ春の日も月に吟む秋の夜もけふはただ夢と消え幻とさりぬ實にや光陰に關守りなく人生の移りやすき思ひても猶あまりこそあれされど深山なる木の葉も端なく烈しき風に拂はれ廣野なる虫の音も何時しか嚴しき霜に消えぬ四方の景色打ちながむれどすごくはたすさまじあはれ今九十日も經たらんにはこの甲午の年も忽ち窮陰をつげ夜半の鐘の音と共にきえゆくぞまた是非もなき

人壽およそ五十年世もし一生の成り行もて四時の順環に比べもしなバ實にこれに擬ふ事最と多かり見よや人初めて生れ出る時正しく春の初めならむ二十左右廿以て夏の初めに當らん四十左右はもて秋の初めに當らん五十六十は紛ふかたなき冬の景色にこそ妾生れてこゝに二十とせなれバ春の彌生の比もはや消えけふは夏のはじめにわたれり未だ年老たるとにはあらねどあはれ妾を生み給へる母妾を育て給へる母しかも深く愛で給ひし母齢すでに六十路となりぬれバ正しく冬の景色なり立冬のころ既にさりぬ除夜なる二三の鐘の音に空しく無常の恨みをそへ露と化り煙ときえ給はんも實に指彈のひまならんこれが此世の習ひならんには是非なきことながらさるにても天道の情けもて一と日なりとも母の齢ひのべさせ給へよ妾これまでの不束をわびもしなん朝な夕な膝下に事へもしなんせめて恩みの萬が一を報ひもせんと思ふをりしも曾まし〳〵女鑑雜誌記者の立冬なる文募らるゝにまかせ思ふ所を斯くはものしぬ

佐々有鄰子

むしのねかれ〳〵にかきねをまとふ葛のうら葉もうらみかねたる霜みねて粟のたり穂の末おもくわさ田かりおげしひつちは花さきそめみるものさくもの時雨の雨にさきだちて山ざとはさらなりみやこの空もそれとわきてかきかぞふべき品はなけれど風の音は窓をたゝき庭のやり水は聲むせびぬ是なん冬の來しるしなるべきと思へバむらきもの心もなにとなうさびしうものかなし

土屋てい子

むら雨の染めてのこせし梢より一葉二葉と散り初めてはや落葉吹く朝風もまづかよ冬を告げそめまがきの菊のうつろへるに初霜のいろみねたるいとあはれなり時雨をいそぐ雲の行かひも夕暮のことにさびしきに山里のありさまをおもひやれどいみじく心細し人めも艸もかれぬとおもへバ走り出の榎木は散りて鳴子繩も切れ〳〵に古案山子のふるみの破れ笠のやつれたるまゝ弓矢はなたぬはむかしの物部のおもかげなるべしされど粟栖野のわ

たりはいかならむ窓の内の埋み火も戀しく夜ふけてみる月影のひやゝかなるもげに冬の來ししるしなるべし

坂口しん子

目にはさやかにと云ひ出べき冬ともなりぬれば夜な／＼友ときゝてしさを鹿の聲もかれ／＼にて秋のにしきとたのみつる木々の紅葉も半は散り失せぬ今まではさしも目にはとまらざりける遠山の松の林のことさらに見出されあるは昨日まで草の葉にかくれて見えわかざりし火葬塲の石地藏も今日はあらはに見られてなにとなく物すごし垣ほに結べる霜の花に千年をかけし菊の花の今日か明日かとばかりに乱れて自づととちめもくづるゝなど冬立つさまこそ實にさびしき限りなれ

松田　孝子

野末に綻び初めし藤袴つゞれさせてふ虫の聲々もいとより細く絶え／＼に樹々の梢に錦せし葉のありとあるかぎりは誘ひ飛してけふより冬と音づる風に聲立つるものは軒の松が枝さては瓦の鬼の

み

太田　貞子

もみづる木の葉の色ふかうなりぬれば早や冬も近からむとあはれに見るほどにいつしか時雨さへ音づれて山々の松の木立もしるくけぢめたつこそいともわびしけれまして片山里の冬立つあしたはあはれも一入まさるべうなん庭より初めねならぬ閨の中迄紅葉ばの吹き入りて夜の衾のこゝかしこに散り居れるなどあかず思はるかし玉しきの都の中は木の葉こそ少なけれ冬立つ景色は田舎にもをさをさ劣るまじくや道行く人もやう／＼疎くなり大路のけはひ何となう物さびしう事かはれりわきて家毎に戸などさしこめて所せく住みなしたる樣一きは冬の心地もまさるわざなれや

植木　鋼子

四時のうつり替るは年毎同じ例ながら春は花鳥のいろ音にうかれ夏は青葉の陰にすゝ風をしたひ秋は紅葉をかり暮す間にいつしか籬の菊もうつろひ露のそこなる虫の音も絶えて今朝は梢を拂ふ嵐の

音もすさまじく晴曇り定めなき時雨の雲を誘ひがほにてあはれ冬こそ來にけらしと思へバ一年の限りも指折て數ふる程漸やくに近づきぬかし

相賀　金子

光陰は矢の如しとかやうべなり春くれなつゆきてはしゐに待し月影もいつしかはやくれたけの夜々の寒さもいやまさり目には見えねどけさはしも昨日にかはる鹿の聲見渡す里の遠近に冬立田姫織かけし木葉のにしき今ははや千草の露もむすばれてうるはしかりし虫のねもおとろへはてゝ一時をくねりし花もいかめしき藤たかまさへをれふしておごりし秋をしたふもをかし八束穂のたりほの稲もかりあげて山邊も野邊も一色のあはれとなれバ行きかよふ人めもかれて朝毎におき渡しつる白たへの霜をのみこそ花とみれ薄すみの夕となれど打しぐれ梢にのこる紅葉どをあとなくちらすこがらしの日にげにあはれそひにけりまことに光陰は矢の如しうつせみのよもはたふれにことなることなしとそゝろに移り易き朝のけしきのながめらるゝや

降田　槙子

さてをりふしの移り變はるほどときものはあらざるべし物のあはれを取りあつめたる秋もいつしか暮れ行きて今日みふゆ立つ日となりぬれバ花の都はいざ知らず此山里のけはひは何となくさう〳〵しく松吹く風の音も昨日にまさり時雨をさへ誘ひ來てけしきどかり降りたるは冬を知らする心にや昨日までは紅葉〳〵とめでられしを一と夜のまにおほかたはちりはてゝときはの松の木の間に三ひら四ひら殘れることそうたてけれ垣根の菊も盛りを過ぎ色香もあせぬれバ訪ふ人の道もとたえてなかなかに心ぐるしく秋にもまさりてあはれになんつれ〴〵なるまゝに木枯の吹きすさぶ空をながめて人めも草もといふ歌をくりかへしつゝ筆とりいでてつたなきことを書きつくるになん

門田八重子

にはかにさむさの朝な夕な身にしむころとなりにたれど大陰の暦の月日はいかにとさぐり見れど霜降の節より十五日を過る後にあたる立冬の日にし

てとりもなほさず神な月に入る日なりいかなれば神な月と申すが此の月はもろこしのひじりのあらはせる易となんいふ書に純陰の月と申し侍ふさあれど一陽いまだ返らぬ月にして陽なき月と申すなり我邦神を陽と申す故に神無月となん申し侍る又一説にやくもたつ出雲の國へ邦々の諸神達皆々參りつどひ給へバ此國のみ神月と申して外の邦々には神まさぬ故神なし月と申し侍ると又小春とも申すよし古にはけふの立冬といふに掃部寮夏の御裝束を撤して冬のにあらためさせ給ふる衣かへの節命の式ありきとぞ承はり侍る又このめを嚙む人たちは爐開き煖爐會などありて茶壺の口切なども申し興するめり何れもさむさを拒く事ならむか然して窓の外の景色は折々時雨ふり木枯の風吹きすさびてさびしと思へども唐歌に一年好景君須記正是橙黄橘綠時とあれど初冬の景色をめづる事もあるなめり先は思ふまゝを筆にまかせて

宇多田揚子

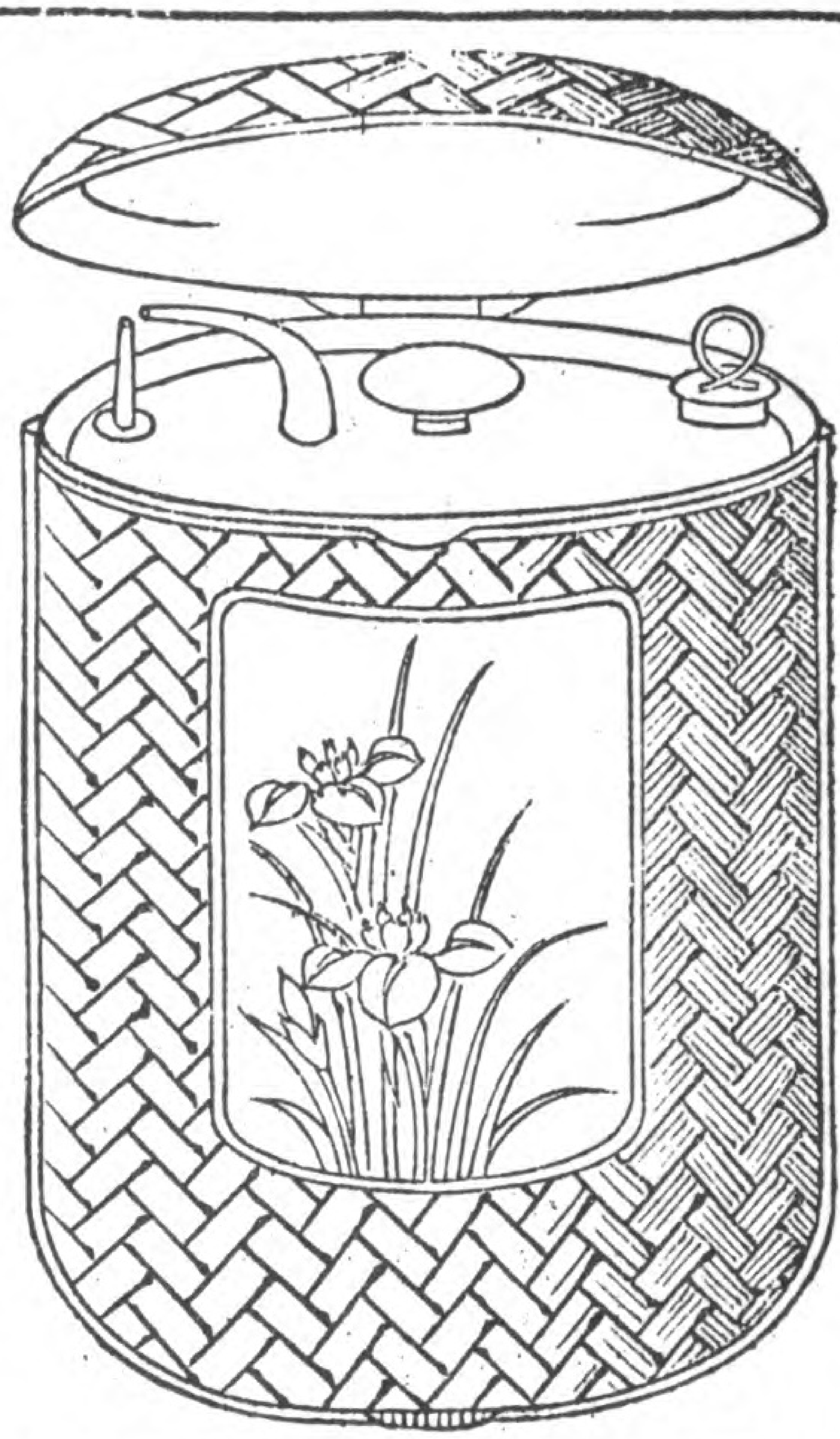
げに流れて早きは月日とや翌日まで唐錦紐ふかと斗りうたがひし紅葉葉は散り乱れて木々の梢見へすきぬ山里近く鳴く鹿の聲は遠ざかり行きまがきの菊はやつれ垣根の虫はかるゝなど野も山もうき秋の形見だに止めず昨日にかへて見る影もなしただ木枯の風の音のみさわぎて冬立つ今日のすゞろにあわれなるはいと身にも思ひ合され中〳〵に過し昔のしのばれてなん





專賣特許 懷中香水吹

今般弊店に於て專賣特許を出願中なる懷中香水吹器具の儀は弊店が多年實地製作に從事し幾多の經驗と工夫とを凝せしに今般漸く其整功を見るに到れり此器具は最も輕便調法なる新奇發明品なれど装飾用は勿論紳士貴婦人方は衛生上御携帶品として片時も欠く可らざる必要品なれバ何卒御試用の上如何ゞ實用に適するかを御證明被成下度近時種々の新發明新工夫の品物尠とせず然れども弊店發明の懷中香水吹の如き定價廉にして啻に香水に止まらず散布用一切に適當なるは他に此類あるを見ず之れ實に弊店獨得の發明なり今般賣擴めの爲め多年御引立を蒙りたる御花主樣へ御禮として實價にて發賣仕候間御試用の上は御朋友樣方へ御吹聽の程奉懇願候



定價

水量四十グラム入

眞鍮製 金九十五錢

洋銀製 金一圓十錢

其他金銀赤銅四分一等御好次第調進仕候

尙又弊店調進の袋物、紙入、煙草入、煙管筒、煙管、指環、帶留、その外貴金屬寶玉珍石象嵌等の品々總て貴顯紳士令孃令閨方の御携帶美術裝飾品は猶一層職工を勵まし其製作と彫刻を吟味致し調進仕候其品柄は堅牢優美にして坊間尋常の品とは一見雲泥の差あるは各御花主樣の疾に知らるゝ處とす且つ弊店の店則として懸直又は巧言等は不申上精々相働き正價を以て御調進申上萬事信用專一に營業仕候に付多少を問はず御用被仰付度此段併て奉願上候

袋物及貴金屬裝飾品商

電話架設中

丸屋商店

東京市京橋區銀座三丁目十一番地

文部省檢定濟

書名	冊數	定價
副島伯爵校閱 東久世伯爵著 松本楓湖畫 尋常小學修身入門	全一冊	一冊 金二錢八厘
仝 教師用	全一冊	一冊 金七錢
尋常小學修身書	全四冊	每冊 金七錢八厘
仝 教師用	全四冊	每冊 金十二錢
高等小學修身書	全四冊	每冊 金九錢七厘
仝 教師用	全四冊	每冊 金二十五錢
校訂 尋常小學修身書	全四冊	每冊 一二 金八錢 三四 金九錢
仝 教師用	全四冊	每冊 一二 金二十錢 三四 金二十二錢
校訂 高等小學修身書	全四冊	每冊 金十錢
仝 教師用	全四冊	每冊 金二十五錢
尋常 小學國史談	全二冊	每冊 金十錢
高等 小學國史	全三冊	每冊 金十九錢

發兌所

國光社

女鑑第七十三號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に郵便料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回　五日　廿日　發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無郵送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年十一月十三日印刷
同　年同　月十四日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

〔明治二十四年八月二十八日內務省許可〕